

目次

第一話	八八年八月五日	富士山総本部	4	第十二話	九〇年三月四日	富士山総本部	94
第二話	八八年十月二日	富士山総本部	21	第十三話	九〇年三月五日	富士山総本部	98
第三話	八九年四月七日	富士山総本部	26	第十四話	九〇年三月十一日	富士山総本部	103
第四話	八九年四月二十五日	富士山総本部	34	第十五話	九〇年三月十三日	富士山総本部	108
第五話	八九年四月二十七日	富士山総本部	37	第十六話	九〇年三月二十四日	富士山総本部	115
第六話	八九年四月二十八日	富士山総本部	48	第十七話	九〇年三月三十一日	富士山総本部	121
第七話	八九年四月二十九日	富士山総本部	54	第十八話	九〇年四月四日	富士山総本部	127
第八話	八九年八月二十日	富士山総本部	60	第十九話	九〇年五月十三日	杉並道場	133
第九話	八九年九月十二日	富士山総本部	69	第二十話	九一年二月十二日	阿蘇シャンバラ精舎	140
第十話	八九年九月二十四日	世田谷道場	77	第二十一話	九一年一月二十六日	上九一色村教学センター	145
第十一話	八九年十一月四日	富士山総本部	87	第二十二話	九二年九月十九日	名古屋支部	154
				第二十三話	九二年九月二十七日	富士山総本部	160
				第二十四話	九二年十一月二日	大阪大学	166
				第二十五話	九二年十一月七日	横浜国立大学	172
				第二十六話	九二年十二月二十二日	東京大学	176

第二十七話	九二年十一月二十三日	京都大学	181	第四十二話	九三年十月七日	京都支部	274
第二十八話	九二年十二月十八日	松本支部	186	第四十三話	九三年十月七日	大阪支部	278
第二十九話	九三年三月二十日	横浜支部	190	第四十四話	九三年十月九日	第一サティアンビル	282
第三十話	九三年三月二十一日	杉並道場	196	第四十五話	九三年十月二十五日	清流精舎	288
第三十一話	九三年三月二十五日	松本支部	206	第四十六話	九四年三月十一日	仙台支部	293
第三十二話	九三年三月二十七日	京都支部	213	第四十七話	九四年三月十二日	大阪支部	301
第三十三話	九三年三月二十八日	名古屋芸術創造センター	220	第四十八話	九四年三月十三日	大阪支部	307
第三十四話	九三年四月八日	広島支部	227	第四十九話	九四年三月十四日	高知支部	313
第三十五話	九三年四月九日	高知支部	230	第五十話	九四年三月十五日	杉並道場	319
第三十六話	九三年四月十日	福岡支部	236	第五十一話	九四年三月二十一日	大阪支部	328
第三十七話	九三年四月十一日	大阪支部	241	第五十二話	九四年三月二十六日	杉並道場	332
第三十八話	九三年四月十七日	仙台支部	248	第五十三話	九四年三月二十七日	杉並道場	339
第三十九話	九三年四月十八日	杉並道場	253	第五十四話	九四年四月二十七日	東京総本部	349
第四十話	九三年四月十九日	札幌支部	264	第五十五話	九四年四月二十九日	名古屋支部	353
第四十一話	九三年十月六日	名古屋支部	271	第五十六話	九四年四月三十日	京都支部	358

今日の話はね、あの君たちのワークと、そして、まあ小乗、大乘、それからタントラね、との兼ね合いとの関係を話したいと考えています。そして、どのようにしたら、君たちが速やかに解脱できるかという話をしたいと考えています。

まず、小乗の定義、あるいは大乘の定義、あるいはタントラの定義というのはわかるか。はい、じゃあ、大師方答えるように。小乗の定義、これは何だ。大師！ 大乘とは、タントラとは。どうだ、小乗の定義は……。はい、小乗とは。

小乗の定義というのは、この世の中の諸現象というものを完全に否定し切ると。完全にすべての楽も苦も否定し切ると。楽の裏側に苦が潜んでいるんだということを意識して否定すると。しかもその否定は意志の力によって行なうと。これが小乗だよ。そして、それを完全に実践するためにはだ、きちんと戒を守り、そして、その否定をする瞑想をしなければならぬ。で、仏教では、ここで、四つの心を専住するところ、四念処の瞑想を挙げてよね、一般的には。わかるか。そして、否定した、否定し切って涅槃に入ると。これがヒナヤーナの涅槃、ニルヴァーナなんだ。

じゃあ、次に大乘の定義とは何だ。はい、ミラレバ。大乘とは？

(ミラレバ大師) 小乗の上にあつて、小乗の上にあつて、世の中をありのままに見る。

そうだな、小乗の上にあつて、世の中をありのままに見つめていく、だけではなくて、四つの無量心を土台としてエネルギーを転化する、昇華すると、そして成就すると。オウムやり方していくと、クンダリニー・ヨーガに非常に近いと。これが大乘である。いいか。

じゃあ、次にだ。タントラはどうだ、タントラは。ケイマ。はい、タントラは？ ヴァジラヤーナはどうだ？ (ケイマ大師)――。

大乘の上にあつて、はい。いいか、ヴァジラヤーナの定義というものは、すべての現象を、諸現象を完璧に

解析し切ることだ。もちろん、それは大乘を背景としていなければならない。いいか。じゃあいったい、その諸現象とは何かというと、自己の煩惱だね、あるいは他の煩惱だ、これを解析し切つて、昇華して、そして完全にその煩惱から解放されると。これがヴァジラヤーナの教えであると。

じゃ、ここで、まだ大師方は最終解脱しているわけじゃないから、いろんなところで引っかかっている。例えばプライド。そうすると、もう自己はかなりの精神的な経験をしているから、自己はプライドが少ないと思つてゐる。ところが、わたしから見ると、プライドが少ないということはあり得ないわけだね。わかるか、プライドが少ないということがあり得ないというのは。ブンナ、わかるか、なぜプライドが少ないということがないといえるんだ？

それは相対の世界だからだ。つまり、ここにプライドが多い人がいると。その人から見たらプライドが少ないと。しかし、プライドの少ない人から見たら、その人はプライドが多いわけだ。だから、プライドを完全に止滅するまで、プライドがわたしは他の人より少ないということはあり得ないわけだ。そして、そう見る者はだよ、そう見る者というのはわたしは歴然としたプライドがあるんだと。そして、そのプライドをつぶさなきゃならないんだと。そのように見る者は、いいか、解脱が早い。しかし、そうではなくて、わたしはプライドが他の人より少ないんだと。何でわたしにプライド、プライドと言うのだろうと。ブラフマン二号だとか、ブラフマン三号だとか言うんだろうと。こういう人は、いいか、なかなか解脱はしない。それは、同じように闘争心もそうだ。

じゃあ、いいカルマについてはどうだろうね。例えば、ここに、他の人よりたくさん功德を積んでる人がいたとしよう。この人は、わたしは一生懸命功德を積んでいる、しかし、報われない。こう考えたら、これは正しいものの見方といえんだろうか。ウッバラヴァンナー、どうだ。なぜいえないんだ？

(ウッバラヴァンナー大師)――。

ああ、それも一つだね。しかし、それだけではなくて、先程の功德にしたって相対の世界なんだ。つまり、自己の上を見ればきりが無い、下を見ればきりが無い。だから、黙々と功德を積み続けると、これが必要なわ

けだ。じゃあ、スタッフの皆さん、あなた方は、功德を日々積んでるわけけども、心がどんどんいい方向へ変化して進んでくるか、どうだ。つらいと考えることはないか、どうだ。じゃあ、これはプーとプーの人に聞こう、どうだ。

——沈黙をもつてよしとするというから、じゃあストレスはないんだな。

じゃあね、いいか。なぜ、そこでストレスが出てくるんだろうかと考えると、なぜだ、それは。じゃ、シャンティー、なぜだ。

(シャンティー大師)——。

功德の総量が減らないから？

(シャンティー大師)——。

ストレスがあるんだと。

(シャンティー大師)——。

そうだな、うん。自己のエゴというのは、煩惱が功德を積ませることを嫌がるんだよ。なぜ嫌がるかというと、功德を積むということは、そのときに苦痛が生じると。逆に、楽しみを求めて動いているときには、功德は消耗しているわけだけど、煩惱は喜びに浸ってるわけだ。そして、高い世界へ行けば行くほど、修行が進めば進むほど、煩惱が弱まってくる、そのために功德が積みやすい状態が出てくるわけだ。ということは、初めの状態では、どうだ、功德が積みやすい状態でないことがわかるね、君たちは。煩惱が強いわけだから。

そして、いいか、どうしても少しの功德しか積めない場合、そして、ストレスが限界になった場合、そこで極厳修行に入り、ラージャ・ヨーガの成就が待ってるわけだね。そして、それよりも、強い意志の力があつて、煩惱も他の人よりは弱いと。そして、前生からの縁によって、今修行ができると、功德の積める状態であると、その人は現世にいて功德を積んで、それでもある時期が来たら限界になると。ただ、時間をかけて積み上げた功德というものは、容器一杯になってるわけだから、その功德のエネルギーをトランスフォームしてね、変形して、変化させて、そしてクンダリー・ヨーガの成就があるんだ。いいかな、ここまでは。どうだ。

そして、もっと修行の進んだ人は、もっと修行の進んでいる人は、グルに対する完璧な信を持ち、そして、ストレスに打ち勝ち、功德も満杯になり、しかもまだ心にある程度ゆとりがあると。そして、自己の煩惱について見つめる力が残っていると。その段階で極厳の修行に入り、二番目のクンダリー・ヨーガと、三番目のジュニア・ヨーガ、あるいはマハムドラー、今わたしは、今日は大乘とタントラという言葉を使ってるけども、この違いは何かというと、本人の功德の量というのはね、同じだけど、本人の意識の状態が違ふということだ。

大乘で、オウムのシステムの場合だよ、極厳に入る場合、もう限界であると。ほとんど寝た状態、眠りの多い状態になると。それで自己を見つめる力が弱っていると。この状態で極厳に入る。この人の、この人の成就はクンダリー・ヨーガであると。

そして、そうではなくて、まだ余力があると。ひょっとしたら一生功德を積み続けても平気であると。その上に思考する力、ものを見つめる力というのは他の人よりも優れていると。この人はジュニア・ヨーガの成就をする。ということは、ジュニア・ヨーガの成就というものは何かというと、あるいはタントラの成就とは何かというと、そこに大乘の要素、あるいは小乗の要素が含まれているということになるよね。わかるか、言ってることは。

そして、スタッフであるあなた方も、この三つに分けられるわけだ。わかるか、それは。あまり功德が積めないで、「苦しい、苦しい」と言っている。いいか。少し功德を積んで、「もう駄目だ」と、「限界です」と、「オウムをやめます」と言う人もいます。こういう人は小乗で行きなさい。極限になったならば、あなた方の精神的限界になったならば、即ちもつて、そして、煩惱を否定する修行に入り、それを乗り越えなさい。これが一番簡単な方法だ。

そうでなくて、もっと器の大きい者はどんどん功德を積んで、功德を満杯にして、そしてそのエネルギーを変化させ、クンダリー・ヨーガのエネルギーに変化させ、成就しなさい。そのときだよ、いいかな。オウムの要素というのは、タントラの要素がかなり含まれているから、大乘といってもタントラの要素が含まれてるから、

あなた方が経験しなければならない次の生の経験、あるいは過去の生の経験、あるいは他の世界の経験をいろいろするだろう。これはクンダリニー・ヨーガの特徴だね。ラージャ・ヨーガにおいてはそれはあまりない、いか。そして、成就する。

あなた方は覚えてるよね。大乘というのは、ありのままに見ると。でしよう。そうすると、例えば、この世の世界も、夢の世界も、あるいは変化身が住む世界も同じなわけだから、この世で経験すること、あるいは変化身の世界で経験することをだよ、合わせるならばだ、そこで一生分、二生分、五生分、十生分、あるいは百生分、千生にもなる。そして、千生分の経験が、あるいは二千生分の経験が終わった段階で、その修行が終わるんだ。

そして、もう少しグルに対する帰依がしっかりしていて、信の篤い者、そして思考する力の強い者は、その上にジュニアーナ・ヨーガ、あるいはマハムドラー——これを言い換えるとタントラの修持というね——の修行によってだ、より早く成就することが出来るわけだ。おかしいじゃないかと。なぜ、例えばジュニアーナ・ヨーガ、あるいはマハムドラーの修行によって早く成就することが出来るんだと、あなた方は考えるかもしれない。ラクシュミー、なぜ早くできると思うか？

(ラクシュミー大師)——。

(サマナ)グルの力によってです。

グルの力によって。まあ、それも一つあるな。他には？ はい、じゃ、岐部君、質問しよう、なぜだ？

(岐部)本人の状態が——。

はい、じゃ、正解を言おうね。ここにコーザルがあつて、アストラルがあつて、現象界があるよね。いいか。そしてラージャ・ヨーガはこの現象界の煩悩を否定するよね、意志の力によって。OKか、それは。クンダリニー・ヨーガはアストラルで経験するよね、OKか。じゃあ、最後のジュニアーナ・ヨーガ、あるいはマハムドラーはどうだ。これはコーザルで叩くよね。わかるか、言ってることは。岐部君、わかるか？ そうするとだ、例えばコーザルからアストラル、現象界と降りてきたデータを処理するのとだ、コーザルからアストラ

ルへ降りてきたデータを処理するのとだ、アストラルに降りる前のコーザルで処理するのとだ、どれが一番速いと思う？ わかるね。つまり、データだけ処理すればいいわけでしょう、それは。より深い意識に到達してそれが出来るかどうかはね、あなた方次第なんだよ。結局、ラージャ・ヨーガで成就したとしてもだ、涅槃するなら別だが、また輪廻転生繰り返す場合、クンダリニー・ヨーガ、あるいはジュニアーナ・ヨーガ、小乗から大乘、あるいはタントラと移行しなきゃならないわけだから、だとしたら今生で一氣に最後まで行くというのがね、一番理想なわけだ。どうだ、わかるか。

よし、では、あなた方がタントラヤーナ、ヴァジラヤーナに入るための条件、これはどのようにしたらいいだろうかね。どうだ。

真実はストレスをたくさん持ったためだ。ストレスのエネルギーというものを昇華して、クンダリニー・ヨーガがあるんだね。もし、ストレスを持たないような生活をしていたら、大乘、あるいはクンダリニー・ヨーガの成就というのはあり得ないわけだね。どうだ、わかるか、それは。ブフーの人たち、わかるか。わかったら返事しろ。

(サマナ)はい。

よし、だから、この二十四時間のワークというのは、あなた方のストレスをどんどんどんどん高じさせるもの、そして、そのストレスを背景として、いや、そうじゃないね、グルに対する帰依というものを背景として二十四時間のワークがあるんだ。そして、二十四時間のワークを背景として、タントラの修行があるんだよ。わかるかな。わかった人は、必ずわかったという返事をしなさい。

(サマナ)はい。

じゃあだ。自分はまだタントラはだめだけど、という人と、自分はもうタントラの道に入ってるんだという人と二つに分かれると思うが、もしだよ、あなた方が大乘の道を歩いていると考えるならば、その背景にあるもの、四つの無量心、いいか、この実践をどのようにしたらいいと考えるか。どうだ。

えー、まず、平岡さん、いるか。

(平岡) はい、――。

四つの無量心を言ってみるよ。大きな声で。

(平岡) 愛、哀れみ、誉め称えること、平等心。

よし。じゃあ、この実践はどのようにしたらいいんだ。じゃあ、ムクタナンダは？ ムクタナンダ、言ってみろ。

(ムクタナンダ) 平等心を背景として――。

聞こえるのか、後ろは。

(サマナ) はい。

ムクタナンダの声は聞こえるね。

(サマナ) いえ、聞こえません。

じゃあ、聞こえるようにしなきゃだめじゃないか。

(ムクタナンダ) はい。平等心を背景として、愛の実践をすることで、自己の苦しみを喜びとして、他の喜びを自己の喜びとしていく。

そうだね。まあ、模範回答の半分だな。そして、すべての苦しみが自己の中に吸収されたとき、内在したとき、内在するまで修行をやめないぞと考えること、これを完璧なる菩提心というんだよ。菩提心というのは四無量心の別名を菩提心というわけね。いいか、だから自己の苦悩を喜びとし、他の苦悩を悲しみとすると。それで、すべての苦悩を自己の中に内在すると。このときに、このときまで自分の修行をやめない、やめないぞと、これが大乘の母胎であると。その心を持っている人は、本当の意味での大乘の修行者ということができると。

それは、このようなもんだ。ここにわたしは大乘を修行しているという人がいたとしよう。この人はだ、修行がどんどん進んでって成就したと。そして最終解脱をしたと。そして、心がチェンジして涅槃してしまったと。どうだ、これは大乘か？ 本当の意味の大乘といえるか？ どうだ。

(サマナ) いえません。

なぜいえないかわかるな。四つの無量心というものがある以上、本当の意味での哀れみというものがあるわけだから、その哀れみはすべての魂に対してだよ、いいか、すべての魂に対して向けられなければならない。そうすると、すべての魂に向けるということは、いいか、その魂が本当の意味での自由・幸福・歓喜を得るまで認めなきゃなんないし、そのような状態を作り上げてあげることが本当の四つの無量心だよ、菩提心だよ。わかるか、言ってることは。

だから、完璧なる四無量心というものは、「すべての魂がマハー・ニルヴァーナに入るまで修行を続けるぞ」という心構えが完全にできた人のことをいうわけだ。そして、あなたの方がその実践に入るまでは、自分を大乘だと考えてはいけない。わかるか、どうだ。

(サマナ) はい。

そして、それができた段階で、本当はもう修行が終わるわけだけでも、できた段階ですべてが終わるんだよ。そしてこれが大乘の修行の土台だ。

じゃあね、なぜ他の苦悩のすべてが自己に内在したときだ、修行が終わるんだ？ これはすごく大切なことだぞ。ブンナ。

(ブンナ大師) はい。

はい、大乘の修行者、ブンナ大師に聞いてみよう。

(ブンナ大師)――。

よし、わかった。はい、ブンナ大師が大乘の定義を説いた。わたしはそうは説かない。いいか、煩悩はなぜ苦しむんだ？ 煩悩を持っている者はなぜ苦しむんだ？ 苦悩があるからだろう、どうだ。どうだ、みんな。

(サマナ) はい。

よし、じゃあ、苦悩が自己の中に内在してしまったとしようじゃないか。内在されているということは、それに対して煩悩が苦悩を感じているか、感じていないか、どうだ。

(サマナ) 感じていない。

感じていないということは、三つの毒、貪・瞋・癡、あるいはラジャス・タマス・サットヴァの働きが生じているか、生じていないか、どうだ。

——生じていないということは、そこで静止が起きているわけだな。それを大涅槃というんだよ。わかるか。ということは、それは最後の解脱じゃないか、どうだ。わかるか、これは言っていることは。わかりますか。わからないか。どこがわからないんだ。

もう一度言うよ。ここに苦悩があると。その苦悩というのは、こちらに煩惱があるから苦悩があるんだよな。どうだ、それは。そこまではOKか。

(サマナ) はい。

その苦悩をどんどん取り込んでいくと。取り込んでいけるということは、どうだ、その苦悩に対して抵抗力ができた状態だよ、どうだそれは。抵抗ができてなければ取り込めないね、どうだ。それはOKか。そして、すべての苦悩が自分の中にあつたということは、それに対して、もうすでに苦悩を感じていないということになるんじゃないか。どうだ。心が働いていないということにならないか、どうだ。わかるか、これは。ここまではわかるか。

(サマナ) はい。

心が働いてないということは、心が止まっているということにならないか、どうだ。そのときわたしたちの貪・瞋・癡は働いてるか、どうだ。じゃ、貪・瞋・癡が働いていない、止滅しているということは、その状態を涅槃しているといえないか。解脱しているといえないか、どうだ。どうだ。

(サマナ) いえます。

しかも、すべての苦を内在しているわけだから、すべての苦というのは、この宇宙にある、欲界にあるすべての苦を内在しているわけだから、もう経験すべきものはないよね、あるか。どうだ。——ない。返事が一人しかないじゃないか。どうだ。

(サマナ) ありません。

これが大乘の解脱だ。だから大乘の解脱というのは決して甘くない。わかるか、言っていることは。

(サマナ) はい。

そして四無量心なんでものは決して簡単ではない。わかるね。

(サマナ) はい。

じゃ、それをもっと速く進める、タントラの解脱、これにはカール・リンポチエの説明によると、ジュニア・ヨーガ、あるいはマハームドラーが加わるわけだけど、これはどのような方法で行なわれると思うか。

じゃ、ケイマ、答えてみる。

(ケイマ大師) ……。

ずれているね、少しね。じゃあ、質問しよう。苦を経験し尽くすということは、どうだ、ものすごく時間がかかることだと思うか、それとも簡単なことだと思うか。どうだ。

——よし。ではね、ではね。いろんな苦悩があるわけだけど、その根本的な苦悩というのはたくさんあると思うか、少ないと思うか。

そして、枝葉を経験する人と、そうじゃなくて根幹を経験する者とは同じ結果に到達できると思うか、できないと思うか。どうだ。これがタントラのものの考え方だよ。いいか、つまり、どういうことかというところ、まず諸現象を理解すると。もちろん、初めは理解する智慧がないわけだから、先程ケイマが言ったように、グルに意識を向けて、グルのエネルギーをもらって、そのデータの解析の仕方を学んで、そしてまず理解しなければならぬわけだけど。また諸現象を理解すると。そして、本質的な部分、苦悩の根本的な部分の取り出しに入るんだ。そして、その苦悩を、根本的な苦悩をバラバラに分解していくと。確かに根本は、最終的には八万四千とカール・リンポチエは言っているんだけど、根本はいくつだ。三つだよ、わすかに、どうだ。貪・瞋・癡という三つだ。だからその根本的なエネルギーを、根本的な思考をだよ、わたしたちが分解できたならば、完全に分解できたならば、どうだ、それは大乘のすべての苦悩を内在したのと同じ結果にならない

いか、どうだ。

(サマナ) はい。

ね、ここにヴァジラヤーナの優位性があるんだよ。じゃ、ヴァジラヤーナは何に対して優位なのかというと、マハーヤーナに対して優位なんだよ。つまり、大乘に対して金剛乗は優位なんだ。優位とは何かというと、短い期間で同じ結果が得られると、わかるか。

(サマナ) はい。

しかし、しかしだよ、結果は同じだけどプロセスは違うよね。そして、大乘の修行者とタントラの修行者の大きな違い、最も大きな違いは、大乘の修行者というものは、もちろんグルというものがあるわけだけど、それはあくまでも教え、その苦悩の枝葉に対する教え、乗り越え方、それを中心としたグルであると。そしてヴァジラヤーナのグルというものは、そうでなくて三つの煩悩をバラバラに分解する、分解させる、いいか、ためのグルであるということだね。

だから、帰依の土台からいったならば、大乘とタントラとを比較するとだよ、それは雲泥の差がなければならぬ。タントラは、ヴァジラヤーナは、完璧な帰依が必要であると。ねえ、大乘は、一応、尊敬、グルを尊敬すればよろしいと。この二つには、大きな違いがある。わかるな、ブンナ。どうだ。

さあ、あなた方は一応、まず原則だけを学んだわけだ。ねえ、では、あなた方はどの道を歩きたいと考えるか、どうだ。できればタントラの道を歩きたいか、うーん。それは大変だなあ。それは簡単にできないぞ。近藤！

(近藤) はい。

お前はどうか。

(近藤) タントラの道を歩きたいと思います。

ほんとか？

(近藤) はい。

じゃ、わたしはヒナヤーナでいいという人はいるか。

うん、他にはいないか。じゃあ、自分はタントラはだめだっていう人はいるか。大乘へ行こうと。どうだ。じゃ、あとはみんなタントラか？ これはすごい集団だね。楽しみにしよう。で、わたしがインドから帰って、あなた方に戒のマントラを与えたよね、覚えてるか。帰依マントラ。「オーム・ナマ——」。覚えてるか。よし、じゃ、近藤、言ってみろ。

(近藤) オーム・アー・フーム

ヴァジラ・ナマ・シヴァヤ

ヴァジラ・ナマ・グルヤ

ヴァジラ・ナマ・サティアンヤ

ヴァジラ・ナマ・十戒ヤ

よし、じゃ、この意味を、鎌田、言ってみろ。言えないか。

(鎌田) ……。

「オーム・アー・フーム」これはわかるね。「オーム・アー・フーム」、つまり、これは身・口・意だったね、における、金剛の「ヴァジラ」ね、「ナマ・シヴァヤ」、シヴァっていうのは、これはシヴァ神のことだけど、オウムでいつているシヴァ神というのは、ヒンドウのシヴァ神と、包含されているけども、同じじゃないんだね。

絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜、マハー・ニルヴァーナにいらっしゃる救済者の救済者という定義をしているよね、わたしたちは、どうだ。これ以上ない偉大なる四つの無量心を背景としたお方であると。これがシヴァ神の定義だね。みんなわかってるね、それは、どうだ。よって、この「ナマ・シヴァヤ」、「シヴァヤ」にはね、釈迦牟尼如来も含めたすべての仏陀が包含されると考えてよろしい。いいね。

じゃ、なぜここで、「ヴァジラ・ナマ」例えば「仏陀ヤ」と言わないかと。これは深い意味合いがあるよね。日本にも仏教は伝来していると。そして、いろいろな宗派が立っていると。しかし、仏教を真に実践している

宗派は一つもないと。そうすると、会員に誤解を招かせることになる、ここで「仏陀」という言葉を使うとわかるね、言っていることは。そこでわたしたちはシヴァ神を立てたんだ。わかるね、言っていることは。

(サマナ) はい。

つまり、名前なんてどうでもいいんだよ。例えばわたしが、例えば「タヌキ」だろうと、あるいは「麻原」であろうと、あるいは「ヘビ」だろうと、そんなのはどうでもいいわけだ、名前は。ここにいる、今、あなた方に講話をしているわたし、で、それを「麻原」と定義しようということで、「麻原彰晃」という名前があるわけだね。それと同じように、シヴァ神もこういう状態のお方と。それをわたしたちはシヴァ神と言っているわけだ。わかるね、言っていることは。

(サマナ) はい。

だから、わたしたちは仏陀を否定しているものではない。いや、そうでなくて肯定しているわけだ。しかし、仏陀という言葉は今使えない。だってそうだろう、まあオウムが現われて、仏陀の意味合いというのは日本において少しずつ変わってきただろうけども、まだ仏像を仏陀だと考えている人たちが多い。わかるな、これは。だからそれを打破しなきゃなんない。そこで、初めに「ヴァジラ」、「ナマ・シヴァヤ」というのがくるんだ。

それで次に「ヴァジラ・ナマ」ね「グルヤ」これはわかるな。あなた方を導く、まああなた方にとってはわたし、あるいは、ええ、人によっては大師を立てるかもしれないけど、……それは。それはグルになると。で、その人の教えによって、あるいはエネルギーによって成就していくわけだから、これは……な帰依をしなければならぬ。わかるな。

そして次は「サティアンヤ」と、「ヴァジラ・ナマ・サティアンヤ」とくる。これは「サティアン」とは何かわかるな。「サティアン」とは「真理」だよ。つまり、これは、仏・法・僧の中の「法」に属するわけだ。しかし、これも同じで、他の仏教団体と混同されてはまずいから、ここで「サティアン」という言葉を使っているわけだ。つまり、「わたしたちは真理に帰依しております」と。いいかな。金剛の真理というのは、不

動の真理、絶対壊れない真理という意味だね。絶対に壊れない真理、絶対に壊れないグル、絶対に壊れないシヴァ神に帰依をしていると。

そして、小乗を歩くにしろ、大乘を歩くにしろ、あるいはタントラを歩くにしろだ、まずベースは小乗である。そして、小乗の十戒をわたしたちは受持しなければならぬ。そこで、「オーム・ナマ・十戒ヤ」と、もちろんこれはサンスクリット語あげてもいいわけだけど、意味がないよね。だから、例えば、三つ目の文もだよ。「オーム・ナマ・真理ヤ」にしてもかまわない。それはどうでもいいことだ、その意味合いがちゃんと伝わっていればね。いいかな、ここは。

そして、この帰依文を唱え続けることによって、あなた方の心の中のデータが、少しずつ変わり、グルに意識が向き、そして、いずれ、いずれだ、きちんとした帰依ができて、ヴァジラヤーナに入り、そして解脱するだろう。近藤。

(近藤) はい。

何回唱えたか、今まで。

(近藤) えーと、帰依文ですか？

帰依文だ。

(近藤) えーと、三千ちよつとです。

足りないな、もつとな、もつと唱えろ。で、これを最低何回唱えろと言ったか、わたしは。

(近藤) 十万回です。

うん。ワークをやりながら、ぶつぶつぶつぶ唱えなさい。よし、そして基礎がきちんとまとまった段階で、いよいよタントラの修行に入っていくわけだ。ここで、一つ気をつけなければならないことがある。それは、二十四時間のワーク、この二十四時間のワークのうち、たとえ二十四時間ワークをしていたとしてもだよ、その中で、例えばあなた方が帰依してるわたしたちだったら、わたし、あるいは大師の意見があったとして、その意見どおりもしあなた方がなさなかったなら、そのワークは無効となる。その理由はわかるか。悟。

(悟) はい。

その理由はわかるか。

(悟) つまり、あのグルの意思というのは、我々の煩惱を弱める働き……そのワークを……。

そのとおりだ。正解だ、言葉は足りないけどね。つまり、どういうことかというところ、ここに自己の煩惱があると。わたしはこうしたい、ああしたいという煩惱があると。それに対して、グルは違うことを言っていると。その場合、もし煩惱を肯定したとしたならば、それは単純に煩惱を増大させた結果にしかない。だから、このワークは無効であるということになるんだ。わかるか。だから、それがヴァジラヤーナに入った人の第一歩である。そして、それを訓練し続けるうちにグルと似てくると。で、全く同じものの考え方、あるいは同じものの見方、これができたとき、もうすでにヴァジラヤーナの成就をしているといつてよからう。

だから、ヴァジラヤーナについてもだ、現世で成就することはできる。それはあなたの方の心の持ち方で決まるわけだ。じゃあ、なぜ、いいか、現世成就ができるんだ。田中！ 田中、来ないか、編集の。

一つ質問しようね、みんなにね。この世は真実だと思うか、それとも幻だと思うか。どうだ。

(サマナ) 幻です。

幻か、真実か、どっちだ。

(サマナ) 幻です。

じゃあ、ちよつと多数決をとろう。幻だと思う人。

(サマナ) はい。

じゃ、真実だと思う人。何人だ。

はい、正解は、この世は真実だともいえるし、幻だともいえる。それは、どういうことか。じゃ、ミラレバ、それはどういうことだ。

(ミラレバ大師) 幻とか真実とか……わかんないということ……。

すごく悩んでいたみたいだけど、実際はそうじゃないね。この世は幻だともいえるし、真実だともいえる。

なぜかというところ、経験したこと、それは真実だよ。あなたの方にとっては、そうじゃないか？ しかし、経験したことが実際に残っているかと。確かに知識とか経験としては残っているけど、それは具体的な形を表わし、形としては残らないわけだから。いや、そうじゃないと、例えばここに彫刻があるとすれば、それを作ったら、作品として残ると、残ってるじゃないかという人もいる。しかし、ここで言う残っているというのは、例えば、制作のプロセスがすべて残っているということを表わしているわけだ。わかるね、言っていることは。で、これは残っていないから、幻だと言うこともできる。

じゃ、同じようにあなたの方が夢で経験すること、あるいは変化身で経験することはどうだ。これは、同じように真実だともいえるし、幻だともいえるんだね。それは同じようにあなたの方が夢で経験したこともあなたの方の経験として残っている。しかし、その経験として残っているもの、データとして残っているものが、その同じ状況というものが二度と返ってこない。だから、幻だともいえる。なぜなら、真実ならば、存在しているならば、いついかなる場所でも同じ状況で接することができるはず、同じ状況で経験できるはずだから。わかるか、これは。

ということは、この現象も、あるいは空性も、いいか、真実だということもできるし、あるいは幻だともいえることができる。わかるか。どうだ。そして、これを『般若心経』の中の、「色不異空」とか「空不異色」、あるいは「色即是空」「空即是色」という言葉で表わされているんだよ。ということは、瞑想上の体験も真実だといえるし、幻だといえる。この世の体験が真実だともいえるし、幻だともいえる。ということは、瞑想しなくても、この世だけでも、この世で瞑想と同じように体験し、それをきちんと消化していったならば、当然解脱が生じるわけだ。なぜならば、瞑想によって、同じ条件下での瞑想によって解脱が生じるとするならば、この現象界における行為によってでも、解脱は生じなきゃならない。わかるね、言っていることは。

(サマナ) はい。

そして、瞑想中にグルからエネルギーを受けて浄化できるとするならば、ワーク中に同じようにグルからエネルギーを受けて浄化できるはずだ。それがヴァジラヤーナの発想だ、いいか。そして、瞑想中に十分思考で

きるならば、ワーク中に十分に思考できるはずである。思考ということが合わなきゃ、思索できるはずである。

ということとはだ、あれっ、ポイントはまだ一つになってきたね。何だ、ポイントは。心の持ち方、精神の集中の仕方によって、ステージというものはいかようにも変化することではないか？ どうだ。そうするとだ、あなた方の明日からのワーク、この意味合いが違ってくるよね。

はい、じゃ終わりました。

(サマナ) どうもありがとうございました。

第二話 (一九八八年十月二日 富士山総本部)

はい、夜礼。次女のね、まず有布がこの三日ぐらい前から三昧に入り出したみたいで、それから今日、満生さんのダルドリー・シッデイが起きて、十月二十日がね、十月十日とか、十月九日とかそれぐらいまでに成就させるんじゃないかなという目安がついてきたと。で、ほつぽと結果が出だしてる。で、あと麗華がいろんな人間にシャクティーパーットをやっているみたいけども、まあ麗華にいじられた人たちの成就というものは、おそらく極端に早くなるだろうと。

で、何をわたしが今言いたいのかというと、いよいよオウムが、ヴァジラヤーナのプロセスに入ってきたと。そして、このヴァジラヤーナのプロセスというのは、善も悪もないと。ただ心を清め、そして真理を直視し、目の前にある修行に没頭し、あとは神聖なるグルのエネルギーの移入によって成就すると。

大乘においては、善行というのはものすごく重きが置かれる。小乗においては、遠離というものが中心となる。そして、金剛乗においては、強い帰依、それからエネルギーの流れ、これが重きを置かれると。

では、この三つというものはいったい、どのようにして違うのだろうか。小乗の世界というものは、この苦というものが存在している中に自己を置いて、そしてその苦悩、苦からすべて離れると。そして離れることによって、まあ言い方を換えれば「離れる」という言葉が合わなければ、「押し退ける」といった方が正しいのかもしれない。押し退けることによって自己を現象と隔離し、そして自己を見つめ、解脱すると。これが小乗のプロセスである。

大乘というものはどうかと。もともと苦というものは存在してるんだと。そして本当の意味でのすべてを知るためには、その苦を直視しなければならぬ。そして直視すると、そうすると、例えば善行をなせば、苦というものの総量はどんどん減ってくる。そして、功德優位、あるいは完全なる功德だけの状態になれば、この世というものはすべてが楽に変わると。これが大乘のプロセス。そして、すべてが楽に変わったということは、苦悩から解脱したということになる。

金剛乗の教えというものは、もともとグルというものを絶対的な立場に置いて、そのグルに帰依すると。そして、自己を空っぽにする努力をしようと。その空っぽになった器に、グルの経験、あるいはグルのエネルギー、これをなみなみと満ち溢れさせると。つまり、グルのクローン化をしようと。あるいは守護者のクローン化をしようと。これがヴァジャヤーナだね。

そして、オウムこの三年の足取りは、まず小乗を説いたと。それは、四念処の観によって小乗を説いたと。我身これ不浄なりと。感覚そのものは苦悩であると。そして、人の心というものは絶えず変化すると。観念というものは自己を苦しめるものであって、それは真実ではないと。身・受・心・法といわれるものです。そして次に『マハーヤーナ・スートラ』をはじめとする善行を説いたと。功德がベースであると。功德によってこの現象は変わり得ると。そしてあなた方、わたしの弟子は激しい修行によって自己を空っぽにし、グルだけを意識することによって、グルの神聖なエネルギーをあなた方に注入されると。それによってあなた方は靈性の向上を行なうと。

そして、わたしの後継者である三女が、自己の立場というものに目覚め、真の意味で帰依のできている……にシャクティパーバットを行なっているみたいだ。で、これは彼女のエネルギーとわたしのエネルギーというのは全く同一だから、おそらく異常なスピードでその祝福を受けた者は進むだろう。もちろんわたしも、今日から少しづつ、少しづつ、成就させようと考えた人たちにエネルギーを入れていきたいと考えている。そして来週の土曜日までには、七名ぐらいのクンダリーニー・ヨーガの成就者を出したいと考えている。ただこの七名は、四月、あるいは五月、六月から激しい修行をしてきた人たちだ。今年、わたしは四十名の成就者を出す約束して、まだ四名の成就者しか出ていない。ということは、あと三十六名の成就者を出さなければならぬ。おそらく十月中に二十名、成就者が出るだろう。そして十一月、十二月であと十六名の成就者が出るかどうかね、わたしの言葉のカルマ、嘘をつかないという実践に大きな影響を与えることになるだろう。

わたしは修行上の嘘はつきたくないし、またつかないつもりでいる。ただそれはあくまでも素材があつて、その素材が全力で自己を磨いたとき、初めてエネルギー移入によって成就というのは成り立つ。

今日、わたしは立位礼拝を見てびっくりした。なぜびっくりしたかというと、ああ早く時間が経てばいいと、できるだけ怠けようと、そういう心でみんなが立位礼拝をやつて。「あー、雑念だ」と、苦だと思いつながらやっている。そういう心の働きでいったいどうして成就があり得ようか。あるいはどうして自己を超越する解脱というものがあり得ようか。

わたしは以前からこう言っている。修行というものは、この現世を超えた人のみ達成することができる。「現世を超えた」とはどのようなことか。ある者は才能を持ち、ある者は人並み以上の優しさを持ち、ある者は人並み以上の自己に対する厳しさを持つ。そしてその修行の途中の過程では、才能や、あるいは優しさや、あるいは厳しさを磨いていく、これが修行であると。そして、その修行の終焉に最終解脱がある。

つまりここに成就者といわれる人がいて、その人が凡夫と変わらない思考をし、凡夫と変わらない才能しかないとするならば、それは成就者でも何でも無い。なぜならば、解脱、これを英語ではエンライトンメントという。エンライトンメントとは何かといったら、人智の進歩と。知性が向上することと訳されている。そして、わたしがカール・リンポチエに、解脱とは何だと聞いたとき、同じように、たくさんさんの解脱があつて、その解脱というものは人智の進歩なんだと言つてらっしゃる。だとするならば、修行し、才能が向上することは当然の前である。だとするならば、意志の力が強くなるのは当たり前であると。だとするならば、幸福になり、豊かになることは当たり前であると。もし、そういうものが植えつかないような修行をしているとしたならば、それは本当の修行ではない。

今日からは、もう一度、今までの自分の修行を振り返ってみようじゃないか。まず立位礼拝のムドラーは、大きな詞章を唱え、そしてさつと五体を投地すると。そのときできるだけ腰を伸ばすと。そしてさつと戻ると。これが立位礼拝のムドラーであると。そうだね。

(サマナ) はい。

それからワークは、ワークの最中、そのワークに集中する。あるいはグルに集中することによって集中力を養う。そうだったね。

(サマナ) はい。

そういうことを意識しないで、できるだけ手を抜こう、できるだけゆつくりやろうと、ああ疲れたなど、そういう心に支配されているようでは、まだまだ解脱はおほつかない。そして、たとえ祝福があったとしても、たとえシャクティーパーットがあったとしても、たとえイニシエーションがあったとしても、その人が自己を集めること、自己の心を成熟させることに集中していなかったならば、結果は得られないだろう。

今日からもう一度考えよう。わたしたちが今、あるいは今から経験することは、苦しみはね、それはすべて未来において苦しまなければならぬ経験だ。

例えば、今日から独房に数名の人間が入る。この人たちがもし、独房の真つ暗闇を恐いと考えたならば、それは間違いなく死後の世界において、輪廻転生において正しくない転生を行なうだろう。なぜならば、闇の恐怖というものが、その人の正確な判断を崩し、そして正しくない光に飛び込む、あるいは正しくないヴィジョンに飛び込んで苦悩の世界に生まれ変わるからだ。

例えば、立位礼拝のとき、カルマが出てきて痛みがあったと。その痛みを必要以上に意識するならば、その人が地獄の炎の中で焼かれるときの苦しみというものは、同じようにすごいはずだ。なぜそういえるかと。

例えば、護摩法のととき、放射熱というものが出る。その同じ距離にいて、炎が同じように赤くなるにかかわらず、ある者はあまり苦痛を感じない。ある者はものすごく熱がる。外的条件は同じだ。しかし内的条件によって苦悩は違うということだ。地獄のカルマがなければいほど、その熱さ、あるいは寒さというものはその環境にあったとしてもこたえない。あるいは闇の恐怖もそうだ。

だからもし、そういうものが心に引かかっているとしたならば、それはいずれ超さなければならない道である。いずれ超さなければならぬ自己の限界であると考え、できるだけ耐え、そして超すように努力しなさい、いいね。

(サマナ) はい。

それが速やかに成就する、解脱する、あるいは幸福になるための道であると、そう考えなさい。いいね。

(サマナ) はい。

よし、では三つだけ質問を取って終わりにしよう。ないか、よし、じゃあ終わりにしよう。全力で頑張んなさい。

はい、今日は新月の日であると。で、新月の日には、ザンゲを行なうことになってたね。で、まあ、ザンゲの意味合いについて、少し説明したいと考えるんだけど、もともとザンゲというのは、心を浄化するための、君たちにとっての利益を起こす一つの修行法であると。そして、心がクリアになれば、ものをありのままに見つめることができる。それによって、ものをはっきりと言いつけることができるようになる。それはちょうど、曇ってるガラス、あるいは色のついてるガラスでは、ものをありのままに映すことはできない。しかし、綺麗な透明な鏡だったならば、すべてをありのままに映すと。

でね、一つ君たちにわたしから言つときたいことがある。それは、心の弱い者は成就もしなければ、涅槃もしなければ、また高い世界へも生まれ変わることができないんだということだ。

心が弱いとはどういうことだろうか。はい、みんなに聞こう。例えばここに真理を否定する、正しくない人がいたとしよう。この人に対しては、わたしたちはどのような道があるだろうか。言つてごらん。まず、こういう道があると。次にこういう道があると。こういう道もある。はい。

その人は真理に対して、その真理を否定するだけではなくて障害となると。どうだ。じゃあまず、君たちが答え出さないから、まずわたしからいこう。第一にはとくと。ほかには。——ほかには。ほっとくしかないのか?——注意してあげる。注意していったい何なのかなあ。注意という意味は、岡本君、どういうことだ。——シッシャではない。——そうです。——何を教えるんだ。ね、岡本君、相手が聞こうとしていないのに、相手に真理の道を教えることができると思うか。

(岡本) すごくしにくいと思うんですけど、わたしだったらきつとお節介で何か言ってしまうんじゃないかと思ひます。

(尊師) じゃ、岡本君は、お節介で何かを言つと。

(岡本) はい。

(尊師) はい。ほかには。——これだけの頭があるわけだから、意見ももつと出てもいいと思うんだけどなあ。どうだ。はい。

(サマナ2) 先生の書かれた本を読ましてあげるとか。

(尊師) わたしの、書いた本を読ましてあげる。うん。ほかには。はい。

(サマナ3) 真理を否定するということは大変な悪業になるということをお節介で教えてあげる。

(尊師) うん。どのようなかたちで教えてあげるか。

(サマナ3) その人がどういうことを、どういうふうな真理を否定するかによると思うんですけど、それが最終的に、その人にとって幸福の道に至らないことを、そこまで考えて教えてあげることだと思います。

(尊師) うん。ほかにはどうだ。はい。

(サマナ4) 世の中に科学では計り知れないものがあることを、実験として体験させてあげる。

(尊師) うん。ほかにはどうだ。

(サマナ5) その人をだまして、知らないうちに功德を積ませてしまふ。

(尊師) その人をだまして知らないうちに功德を積ませてしまふか。うん。ほかにはどうだ。

じゃあ少し例を変えよう。これは、仏陀釈迦牟尼の前生の例だね。彼はある生で貿易商であつたと。そして、その船は大変大きな船で、だいたい貿易商人が二百人から三百人乗っていたと。そして荷物を積んでの帰り道だ。その中の一人が大変——その中の一人がだよ——大変悪い心を持っていて、そして、その部下たち、——その中に部下も紛れ込んでたわけだけど——その部下たちと、その、要するに悪い心を持つてゐる者がすべての貿易商を殺してね、数百人のすべての貿易商を殺して、そして、その貿易商品をすべて自分たちのものにしてうとしたと。はい。仏陀釈迦牟尼はどうしたと思うか。

(サマナ6) ——。

なぜ殺すんだよ。殺生するじゃないか、それは。では君たちだったらどうするか考えてみよう。まず、楽しいねえ、先程の、じゃあ例を当てはめてみるよ。まず、無視すると。次には、説法してあげると。次には、相

手が気づかないうちに功德を積みせると。で、今のわたしが言っているその真理を否定する条件というのは、もっと厳しいでしょう。はい、聞こう。貿易商に対して、その悪党に対してどのような処置をするだろうか。

——じゃあ、大師の意見を聞こうか。じゃあ、まずアポロン大師。

(アポロン大師) 前者の問題ですよ。

(尊師) いや、後者、後者。そのトレーラー、貿易商に対する、

(アポロン大師) 貿易商に対してですか。

(尊師) そうです。

(アポロン大師) 結果ですか、手段ですか。

(尊師) 手段、および結果。

(アポロン大師) 脅す。

(尊師) 脅す。よしわかった。じゃ、アポロン大師は「脅す」と。一つまた新しい答えが出てきたねえ。では次は、そうだね、マハーナーマ大師はどうだ。

(マハーナーマ大師) そうですね、要するに楽しみを求めるために、そういう方向に走るんだから、酒とか眠り薬とか、いろんなもので使って、逆に捕まえてしまおうと。

(尊師) 捕まえてしまおう。うん。——じゃあ、周りが気づいてないとしたらどうするか。

(マハーナーマ大師) 気づいてないとき……。

(尊師) つまり仏陀釈迦牟尼だけが気づいていたと。つまり君だけが気づいていたと。

(マハーナーマ大師) そうですね、力になる人がいないということですね。

(尊師) そうだ。ほかの人は無智で、ようわからん。

(マハーナーマ大師) まあ、小乗的な考えだと、自分だけ逃げるとかすることは……。

(尊師) 自分だけ逃げるか。よししわかった。じゃあ、広瀬いこうか。

(広瀬) まだあまり考えがまとまっていないんですが、何とかだまして捕らえようと思います。

(尊師) 捕らえるか。うん。じゃあ、鈴木はどうだ。

(鈴木) ボロが出るまでは待ちます。

(尊師) だから殺されるかもしれないぞ、みんな。殺されるまで待つか。「それもカルマだ」と言ってね。前生にこのようなカルマがあったから今殺されるんだと。

(鈴木) 周りの人に相談する。

(尊師) 周りの人に相談する。よしわかった。じゃ、佐野はどうだ。

(佐野) ポワさせてあげる。

(尊師) ポワさせてあげるか。では、ラクシュミー大師はどうするか。

(ラクシュミー大師) やっぱいろいろな方法を使っただますと思います。

(尊師) だます。ただ、だましてどうするんだ。相手を。

(ラクシュミー大師) できるだけ真理に近づけるような方向を取っていくと。

(尊師) 真理に近づけるような方向を取っていく。うん。ケイマ大師はどうだ。

(ケイマ大師) まず、自分が仏陀になったつもりでっていうと、当然相手のカルマを見ると思います。で、そのカルマによって判断するしかないと思うんですけれども。それで、だましていけるようだったらもちろんだまして、真理に近づけられるんだったら真理に近づけて、どうしてもその人のカルマが悪かったらば、ポワさせると思います。

(尊師) バタンジャリ大師はどうだ。

(バタンジャリ大師) もしできるんだったら宝石を全部捨てます。

(尊師) うん。バタンジャリ大師、できないんだっただうする。だってその理由は、数百人の貿易商が運んでくるわけだから、ものすごい量だね。それをもし捨てようなんて思おうならば、どうなると思うか。まず捨てようとした人が叩き出されてしまいうね。殺されてしまいうね。で、自分が殺されたのちに、悪党はすべての者を殺すよね。だからそこが問題だね、その数百人というのが一つのポイントなんだよ。つまり一人二人

の宝石の量だったら、貿易における宝石の量だったら大したことがない。——はい。だって、海の真ん中だよ。船が沈んだら、みんな死んじゃうよ。

ねえ。なぜわたしが今こういう質問を君たちにしてるかというのと、要するに人というのは、それぞれ心というものを持っている。そして心の強さ、あるいは心の弱さがあるんだよということだ。

これは来月号に書く「恐ろしい魔境」の内容だけでも、以前シッシャにM君という人がいた。で、彼は信徒からシッシャになる時に、すでにお金を隠し持ち、二十万円のお金を持っていて、それはミラレパ大師のポディーチェックのときに出てきて、それはバックされた。そしてそれだけではなくて、彼は出家する以前に柔道整復師というのをやってたわけだけど、そのときに、要するに保険請求を行なって、そして一千万円以上のお金をだまし取っていた。で、そのお金を隠し持ち、結局三月の段階で、要するに経費を使い込み、そしてその一千万のお金を、要するに執着があるために、オウムから、要するに去った。しかも無断で去った。で、ポイントはこのなんだよ。そのあと結局連絡があつて、その内容を聞いたとき、全額を布施してシッシャになるのだったらそれもよからうと、もしそうでなければ信徒としては認めらんない。で、その話を……大師がしたところ、じゃあ、初めシッシャになりますという話をしたそう。で、布施をして。で、わたしは彼に、……大師に対してね、「それはたぶん、無理だよ」って。彼は、その一千万のお布施をして、シッシャになることはできない。なぜならばそれが彼のカルマだからだと。そして彼は、最も悪いパターンでは地獄と。一歩進んで、いいパターンだとするならば餓鬼の世界へ生まれ変わるだろう。そしてそれが彼のカルマなんだよ。なぜだかわかるかな、これは。

その理由というのは、よく考えてみようね。真理を知る前に、例えば不正なことを行なうと。悪いことを行なうと。例えば、その不正なこと悪いことが真理に使われたとするならば、それはタントラの教えにおいて悪業をもって善業に転換するという理論があるから、それはそれでOKであると。

ところが彼は真理の修行をする以前に悪業をなし、真理を知っても、悪業の、物質に対して執着を持っていた。だとしたらどうなる、君たち。しかもシッシャになって真理をたくさん学んだと。ところが頭ではそ

れがわかっていても、実際には理解できていない。ということとは心は真理を否定してることになるかな、肯定してることになるかな。どうだ。否定してることになるよ。

そうすると、わたしたちが輪廻転生するとき、最も大切なのは身・口・意の働き中の何だ？——身だね。ん？——身・口・意の働きの中で身か。意だよ。つまりどういうことかというのと、意の働きによって口のカルマが生じるし、意の働きによって、身体の行為の働きが生じるよ。だから意というのは、根本的にわたしたちを動かしてるもんだよね。それはOKかな。ということは、彼がそれだけ執着したということは、そして正しい道を歩いていたと、歩いているということは、彼の道は一つしかないわけだ。

で、これが真理だと。そうするとね、今いろんな答えを聞いて感じることは、真理に対しての割り切りがないなど。それから自分の立場に対する傲慢さがあるなって気がするね。例えば、今言ったように、カルマというものは歴然として存在していると。そして、ある者は、ある魂は虫に生まれ、ある魂は地獄に生まれ、ある魂は餓鬼に生まれると。それはわかるかな。そして例えば仏陀釈迦牟尼ですら、できないものはできないんだよ。それはなぜかという、機が熟するまではそれを変化させることはできないんだよ。だとすると、わたしたちの答えてるのは三つしかないんだ。例えばここに障害物があると。それを一つは無視すると。一つはその障害物に負けると。もう一つは、障害物を取り除くと。いいかな、これは。

そして、障害物に負ける、これはだいたいシッシャになりたてのころの、というよりも、なかなか成就しない人のパターンだね。つまりこれは心が弱い状態であると。本当に心が強ければ、淡々とものを処理する。しかもそれは心の動揺なしに処理する。

例えば、ここに悪業をなしてる人がいたでしょう。そうするとこの人は生き続けることによって、どうだ善業をなすと思うか、悪業をなすと思うか。そして、この人がもし悪業をなし続けるとしたら、この人の転生はいい転生をすると思うか悪い転生をすると思うか。だとしたらここで、彼の生命をトランスフォームさせてあげること、それによって彼はいったん苦しみの世界に生まれ変わるかもしれないけど、その苦しみの世界が彼にとってはプラスになるかマイナスになるか。プラスになるよ、当然。これがタントラの教えなんだよ。

ただ、これは深遠で難しい。どうしても心の弱さが出ると、そこまで断定的に判断することはできないと。ただ君たちがだよ、今生で最終解脱を考えているんだったら、最も強い心の働きを持ちなさいと。だまして、教化できる範囲っていうのは決まってるんだね。相手が真理と、それから真理じゃない中間状態にある場合は、だまして真理へ連れてくることができる。しかし完璧に悪業をなして、もう全く真理との縁がないと。この人はトランスフォームした方がいいんだ、本当は。

そういうとある人はこう考えるかもしれない。いや、それは完全に排他的な心の現われじゃないかと。でもそうではないんだね。排他的な心の現われではなくて、それは相手に対する愛なんだよ。

それはちょうどこのようなものだ。例えばここにある人がいてだよ、いいかな。この人は百万円の借金を持つてるとしよう。いいね。で、この百万円の借金をしよめたまま生かしていくと。で、それ以上援助しない

と。で、この人は百万円を少しづつ返して返済できるかもしれない。これはいいね、利息の問題から。ところがこの人は百万円借金をしよって、この人はかわいそうだと。もう一千万、あるいは一億貸したとしよう。どうだこの人の働きから考えて、例えばね。月に例えば三十万給料としようね。そうすると年間三百六十万だと。そうすると例えば、一千万借りたとしたら、まあ年に一割として百万である。あるいは一億貸したとしたら、年利は一割として一千万だね。当然、一億円、その人がその百万円を挽回するため、極端な言い方をすれば一千万にしようね、スタートを。一千万を挽回するために、一億円借りたとして、その人のカルマの限界が例えば三百万だとしたならば、返せるかな。じゃあ、ここで一億円貸したことはこれは、彼を益したことになるか、それとも害したことになるかと。——ということなんだよ。

そして、このように考えられる人はタントリスト向きであると。ところがそうではなくて、「あーかわいそうに」と、「一千万、ここに借金してる」と。「じゃあもう一億円貸しましょう」と。「もう十億円貸しましょう」と。で、これを悪業の考え方で見るならば、「この人はこの人で生きる権利がある」と、例えば。「この人はこの人で例え、自己を主張する権限があるんだ」と。で、「すべての魂において生きる権限がある」と。「自己を主張する権限があるんだ」と考えるのが、ヒナヤーナの考え方であると。そして、マハーヤーナの

な考え方はケースバイケースであると。そして、ヴァジラヤーナの考え方、そのケースバイケースを解脱者が判断すると。よって、ヴァジラヤーナにはポワという考え方ができたわけだね。

まあ今日君たちに話したかったことはどういうことかという、心を君たちが強く持てば持つほど成就は早いよと。君たちの心が弱ければ弱いほど成就は遅いよということだ。よって、単にポワとしてると。単に、例えば外的にいろいろあつて「あーそうだ」と。「わかりました」と、そのような心の働きをしていたら、いつまでたっても成就しないよということを君たちに話したかったわけだ。

それでは、それはなぜだろうか。いいかな。わたしたちが修行するとき、いろいろ悪魔の邪魔が入る。これはOKだね。そしてその悪魔ってわたしたちの心に住んでるよね。これはどうかな。じゃあその悪魔に対しては、毅然とした態度で接すべきだと思うか。それとも悪魔の言うとおりに、「右だ」「わかりました。じゃあ右を歩きましょう」と、「左だ」「わかりました。左を歩きましょう」とすべきだと思うか。どうだ。

ところが、毅然ということはそこでおつかり合いが生じるか生じないか。ということ、おつかり合いを生じさせて、聞ってる人の方が成就が早いと思うか。それとも、「右だ」「わかりました」「左だ」「わかりました」の方が成就するのは早いと思うか。

そこで闘いが出てくるんだよ。ということは、心における悪魔というのは、わたしたちの例えば煩悩である。あるいは欲界の主であると。じゃ、この現象界における悪魔というのは存在すると思うか。と思うか。——当然存在するよね。なぜ存在するかというと、例えば、真理に対して圧力を加えてくる者と。で、その圧力を加えてくる者に対しては当然わたしたちは闘わなきゃならない。どうかなこれは。それとも、闘わないで、「あー、わかりました。じゃあ、真理を捨てましょう」となるか?——どちらかしかないんだね、これは。そして、オウム真理教が大きくなればなるほど、はつきりしたかたちでその状態が現われてくるだろう。あとは君たちが一生懸命修行をお積みになって、そして心を浄化なさって、早く成就なさって、真理を見極めていただく。そして、そうなれば、わたしの言っている本当の意味合いというのが理解おできになるんじゃないかなと、わたしは思っています。

修行には三つの道がある。その第一は小乗、ヒナヤーナの修行だし、第二は大乗、マハーヤーナの修行だし、第三はタントラ・ヴァジラヤーナ、秘密金剛乘的な修行である。そして、小乗・大乗・真言秘密金剛乘というね、この三つは下から順に激しくなっていく。

この現世というものは末法の相を呈している。わたしの弟子である君たちは、もう十二時を過ぎたから昨日ということになるけども、昨日、わたしと一緒に都庁、そして文化庁へと行った。そこで、社会的に一応地位の保障されている役人の言葉、あるいは姿勢、これを見て何を感じただろうか。どうだ。

この現象界、これは真理の時代、つまり正法の時代だと感じただろうか。それとも、教えがきちんと残っていて、ある程度みんな教えの実践を行なっているという像法の時代と感じただろうか。それとも法は廃れ、凡夫・外道はいつさい真理を行なおうとしないという末法の世だと感じただろうか。どうだ。

(一同) 末法です！

ということは、正法・像法・末法という三つの法の移り変わりの中で、あなた方が成就し、済度するために考えなければならない点、正法の時代と末法の時代、どちらの方が真理は広めやすいと思うか。どうだ。

(一同) 正法です。

ではね、ここに一人の辟支仏の修行者がいて、ここに一人の多聞の修行者がいて、そして、この末法の世を救いたいと考えたと。救うことができると思うか、できないと思うか、どうだ。——辟支という意味わかるかな。独覚だ、独覚。つまり小乗の悟りのことを表わしてるわけだけどね、どうだ。——できないよね。だとしたら、救済を考えるならば、すべての、シッシャすべてがその道を歩くことは無理だけでも、少なくとも一部の人間はどうだ、タントラ・ヴァジラヤーナの道を歩かなければ、真理の流布はできないと思わないか。どうだ。

(一同) はい！

そして今日、わたしはタントラの教えにのっとって、彼らと会い、交渉した。君たちは今日、わたしの話し方というものが理解できたよね、どうだ。

(一同) はい！

そして、単に今の役所の方々は権力というものに屈していると。どうだこれは。

(一同) はい！

では君たちに聞こう。もし真理がだ、権力につぶされるような事態になるとするならば、君たちはどうするか。どうだ。これはいろいろ意見があるだろう。君たちの、じゃあ、三つに分けよう。まず、真理のために戦うという一つの意見と、そしてそういうものから逃げるという意見と、それから真理を捨て去って、その世の中に迎合するという三つだ。どうだ。じゃあ、まず戦うという人はどれぐらいいるか。じゃ返事をしてごらん、戦うという人。

(一同) はい！！

では、逃げるという人はどうだ。

(一同) ……。

一人もいないのか。では、もうつぶされたんだから現世へ帰って、現世にまみれるという人はどうだ。

(一同) ……。

うん。だとするならばだ、もつともつと、君たちは自覚を持たなければならぬ。何に対する自覚だと。自分は今世で解脱・悟りを目指すんだと。そして、もし真理を阻害するものがあるならば、それは打ち破っていかねばならないと。そのためには、自己を律し、そして与えられたワークに励み、それだけではなく、絶えず真理というものを意識し続けると。そして最も早い道で成就をします。もし君たち一人一人がそれができるならば、わたしは日本そのものがオウム真理教と変わる日は近いんじゃないかと、日本そのものが仏陀の国に変わる時というのは近いんじゃないかと、そう確信しています。

今日、昨日一日行なわれたことをもう一度顧み、なぜグルはあのかあいう話し方をしたのかと、なぜグ

ルはあのとときああいいう強い言葉を使ったのかと、なぜグルはあのととき柔らかい言葉を使ったのかということをもう一度思い浮かべ、そして相手の表情、あるいは反応を考えながら復習しなさい。それがね、君たちが三番目に通過しなければならぬマホームドラーの成就と大いに関係のあることだということを理解した上でやりなさい。いいね。

(一同) はい！

もう一度確認する。今の世は、今日君たちが見た、昨日君たちが見たように末法だ。そして末法に真理の灯明を照らし、正法の時代にすることは難しい。しかしわたしたちは、正法の時代を作り上げるために生まれてきてるんだ。それをよく理解し、実践しよう。いいね。

(一同) はい！

第五話 (一九八九年四月二十七日 富士山総本部)

今日はね、五道、三乗について説きたいと思います。五道、三乗とは何かと。この五道、三乗というのは、まず第一の道、これはわたしたちが阿修羅・人間・動物・餓鬼・地獄へと至る道であると。第二の道は何かと。これは四天王・忉利天・夜摩天・兜率天、そして樂變化天・他化自在天へ至る道であると。第三の道は何かと。いったら、これは独覺とか、辟支仏とかいった世界へ至る道であると。第四の道は何だと。これは多聞の道であると。第五の道は何だと。これは菩薩の道であると。そして、この辟支・多聞・菩薩、この三つの分け方をもう少し違った形で分ける。それが三乗、つまり、小乗、大乘、そして秘密金剛乗であると。

では、なぜ欲の六つの世界なのに、天界だけ別な扱いをしているんだと。カッサバ、なぜ天界だけ別な扱いをしているんだ。

(マハーカッサバ大師)――。

これは他の五つの世界に比べて徳という意味でね、安定した状態だからだ。そして、この安定した徳の状態、これはわたしたちに長い間の喜びを与えてくれる。マイトレーヤ。

(マイトレーヤ大師) はい。

では、なぜ天界へ生まれ変わることは素晴らしいことなんだ。

(マイトレーヤ大師)――。

そうではない。修行している者が天界へ生まれ変わる、これは素晴らしいことであると。

(マイトレーヤ大師)――。

もちろんそのとおりだ。では、なぜ天界へ生まれ変わって素晴らしいかと。まあ、マイトレーヤの言っていることは一つの正しい理論である。しかしそれだけではない。よく考えてみよう。天界という言葉と神という言葉は同一であろうか、なからうかと。どうだ。

よし、では、神の持つ力にはどういう力があるか。天眼・天耳・他心・漏尽・宿命・神足この六つがあるよ

ね。そして、まあ漏尽というのはね、これは煩悩を滅する修行をしていなければ、なかなか得難いものだけど、今生で、例えば在家でできるだけ修行し、例えば出家してできるだけ煩悩を落とすと。そうすると、落としてない者に比べたらものをどうだ、ありのままに見つめることができると思うか、できないと思うか。これが漏尽の根本だよ。そして、天眼があると。宿命があると。

それによってわたしたちはわたしたちの生じ、生じては滅するという輪廻というものをよく理解できると思うか、できないと思うか。ということは前生修行し、そして煩悩をある程度滅却した者にとつては、その天の世界そのものは空しいと思うか、空しくないと思うか。楽しいけども空しいよね。そしてその空しさの背景、それを支えるものは何かといったら、先程言った神通力であると。

もう一度繰り返すならば、神という言葉と天という言葉は同義であると。ということは神通を持たない修行者という者は、どうだ、よく仏教ではね、サーリプッタ、マハーモッガラナという二大弟子の名前を挙げて、マハーモッガラナ、イコール神通力者、サーリプッタ、イコール智慧者と、つまり方便自在であると、いわれている。しかしだ、サーリプッタは神通がなかっただろうか、どうだこれは。例えば、説法をする場合相手の心の状態がわからなくて正しい説法ができるだろうか、どうだ。

つまり、わたしたちが最終的には、この欲六界を脱出し、そして「有」の世界である、七つのジャンルに分かれた十七の世界に生まれ変わるためには、天界へ生まれ変わることが一番いいわけだ。もちろんね、人間の世界に仏陀、あるいは素晴らしいグルが登場したならば、そりゃ人間の世界というのは、天界に比べて苦しみが多いから、今生でその苦と楽というものを経験できるから、人間界へ生まれた方がいいだろう。しかし、例えば真理を説く者がいないとするならば、どうだ、この人間界に果たして魅力というものがあるだろうか。よって、仏典では兜率天で修行者が修行しているんだという一説があるわけだ。

わたしはこう考えている。徳のある者は、苦悩多きこの人間の世界にね、素晴らしい宗教的な指導者が誕生したときは、人間の世界へ生まれるだろう。次に徳のある者は、天界に素晴らしい指導者が登場したとき、天の世界へ生まれるだろう。そして三番目に素晴らしい徳を持った者は、天の世界に指導者がいないとき、神通

を、天に生まれるわけだから、持って、天に生まれ、無常を知るだろうと。そして、最も徳がないのは、指導者のいない人間の世界へ生まれる変わると。

ここでなぜ特別に人間とそれから天界を、わたしが出した理由というのはわかるよね。阿修羅というのは一般的には修行しづらいといわれている。実際はそうじゃないけど。でもここでね、それをそうじゃないということ、時間を使って説法すること自体、意味がないからここではそれは避けると。そうすると、動物、あるいは餓鬼、地獄に関しては、なかなか真理というものはないわけだから、これは例外であると。だから天の世界と人間の世界を対比してね、今話したわけだ。

するとだ、グルがいよいよといまいと、天の世界へ生まれた修行者というものは、しかも煩悩を滅する訓練をしている修行者というものはどうだ、素晴らしいと思わないか。マイトレーヤ、わたしの言いたいことはわかったか。

(マイトレーヤ大師) わかりました。

うん。これが第二の道。天へ生まれ変わる道であると。

では、いったい天へ生まれ変わるためには何をやらなければならないか。これは簡単なことだね。グル、そして真理、そして修行者に対して、大いなる功徳を積み、そしてできるだけ十の戒めを守り、七つの善行を行なうと。

七つの善行というのは十の戒めの裏返しだったよね。第一は、生き物を殺さないで、慈しむ。第二は、盗みをなさないで施す。それから三番目のね、妻以外の者と、あるいは夫以外の者と、あるいは愛のないセックスをしないと。そして四番目は、嘘をつかないと。五番目は、一日一回の食事をとると。六番目は、堅い寝床で寝ると。例えば床に毛布を一枚敷いてとかね。決して豊かな寝具の上では寝ないと。

はい。では、このね、六番目、なぜ豊かなね、柔らかい寝具の上で寝てはいけないんだという質問に対してどう答えるか。じゃあ、バタンジャリ、どうだ。

(バタンジャリ大師) ——。

今、バタンジャリ大師が難しい言葉、「喜貪」という言葉を使っただけ、これはわかるね。貪りを喜ぶと。

そしてどうだ。柔らかい布団に寝ていれば、たくさん寝たいと思うか、思わないか。ところが、寝床がひどければ、どうだ。早く起きたいと思わないか。そして、眠りが長ければ、それはわたしたちの心を愚鈍にしないか。ということなんだね。よって、六番目にできるだけ堅い布団に寝ると。そして七番目は食りを離れると。これが天へ生まれ変わる道であると。

もちろん、この全部を達成すれば、欲界というのはね、エネルギーの世界であると。しかも熱エネルギー優位の世界である。じゃあ、マンジュシュリー大師に聞こう。ここに一キロの爆薬があったと。ここに一トンの爆薬があったと。どちらの方が熱エネルギーが強いと思うか、爆発したとき。

(マンジュシュリー大師)――。

そうだね。この一キロと一トンの比喩というのは何だかわかるか。

(マンジュシュリー大師)――。

うん。功德、あるいはエネルギーということが出来る。例えば、現代人という者は低いレベルで安定している。これはね、君たちがまだ切れていない例えは性的な煩惱があると。そうすると性的な煩惱が高じてくると。これは一種の爆薬だ。ところが、その器が小さいと低いレベルで爆発してしまう。そうするとそれは静まると。またエネルギーが高じてくると。そしてまた爆発すると。これを繰り返すと。そうするとどうだ、爆薬の量というのは増えると思うか、増えないと思うか。

(マンジュシュリー大師)――。

ね、ところが蓄えていると、それはつらいんだけど、少しずつ少しずつ器が大きくなると。そして例えば死んでいくと。そうすると、そこで爆発が起きると。そうすると当然熱エネルギーの多い方が高い世界なわけだから、その人の方が高い世界へ生まれ変わると。

じゃあ、怒りだって、熱エネルギーだから、どんどん怒ってればいいじゃないかと。どうだこれは。どうだ。(サマナたち)――。

ところが怒りというものはエネルギーを生じるのではなくて、エネルギーを発散するんだね。わたしもね、

この前、都庁に行ったとき、あまりにも課長や課長補佐の対応がひどかったんで、グヤサマジヤの怒りを発してしまった。わたしの周りにはものすごく熱かったそうだ。でもその熱かったというエネルギーはどこから出てくるかというと、要するにわたしの生命エネルギーだよ。で、エネルギーを発散したということはどうなる。エネルギーを得たことになると思うか、損をしたことになると思うか。

(サマナたち)――。

そうだね。よって、必要のないことで怒ることは自己の損失であると、感じなければならない。

よって、あなた方がエネルギーをできるだけ蓄え、そして功德をお積みになってね、そのエネルギーを上昇していくと。これが第二の道の天へ至る道であると。

ということは、他の五つの世界に単純に生まれ変わる方法というのは簡単だな。どうだ。まず、喜んで貪る。そして、自分と敵対する者に対してはすべて嫌悪の念を持って怒ると。そして、意味のないことにエネルギーを徹底的に浪費すると。そして、ああ、楽しかったと思うと。どうだ、この後は。わたしたちの行き着く先は五道だよ。五道の、地獄から阿修羅までの世界であると。わかったかな。

(サマナたち) はい。

でもね、君たちはこう考えるかもしれない。でもこの前のとき麻原はね、怒ったじゃないかと。そこで、先程の小乗、大乘、それからね、秘密金剛乗、タントラ・ヴァジラヤーナという話が出てくるんだ。

一つ質問しようね。ここに二つの怒りがあると。一つは自己を保全するために怒ったと。もう一つは例えばね、真理を守るために、あるいは正義を通すために怒りを発したと。この二つの怒りは、本質的には同じだと思うか、違うと思うか。どのように違うと思うか。じゃあ、サラスヴァティー――。

(サラスヴァティー大師)――。

他にあるか。わたしはこういう意見だというのは、どうだ大師。ケイマ、どうだ。

(ケイマ大師)――。

クラ、どうだ。心を成熟させるときの修行、これは自利であろうか、利他であろうかと。自利というのは自

己を利すると。利他というのは他を利すると。どっちだ。心を成熟させる修行、それは利他であると。そして、例えば自己の怒りによって、自己のエネルギーの損失が生じると。でもそれによって真理が保全されるということ、これはね、自利であろうか、利他であろうか、どうだ。そしてその利他心というのは心を成熟させるだろうか、させないであろうかと。そして、心を成熟させるということはどうだ。わたしたちが本来持っている、経験していかなきゃならない高い経験をさせることになるんじゃないか。自己の利益保全のための行、つまり行ないというものは、これはわたしたちを欲の世界に結びつけてしまうよね。わかるね。ところが、利他というものは逆にわたしたちを欲の世界から解放する働きがあるよね、どうだ。

では、欲界と色界とはどちらが高いであろうかと。欲界と上位アストラル世界はどちらが高いであろうかと。どうだ。色界の方が高いよね。欲界というのは自利の世界であると。色界というのは利他の世界であると。そう考えることができる。

次にだ。では、色界にはどのようにしたら生まれ変わることができるだろうか。どうだこれは。じゃあ、ミラレバ。

(ミラレバ大師)――。

うん。要するに数学だね。例えば、三引く二は一になるのと同じだ。つまりわたしたちの持っている貪り、嫌悪、そして無智といったこの三つを取り除くと。しかし、ただ一つ取り除かないものがあると。それは生命に対する欲求であると。もう、もともと、貪り・嫌悪・無智を取り除いたら、その世界はすごく美しい世界なんだね。よって君たちが煩惱を滅却し、そして利他の心を持ち、そして生命に対する愛着はまだ切れないと。このとき、君たちは色界に生まれ変わります。

そして、生命に対する愛着すらだよ、その生命に対する愛着というのは、わたしは生命に対する愛着はないよといっている人も中にはいるけど、ここでいう生命に対する愛着とは、この肉体から魂が抜け出すとき、これは瞑想で経験するわけだけど、それに対して平気で、しかも「有」に対して執着しないと。「有」というのは形あるものに対して執着しないとき、その人は無色界に生まれ変わります。しかも、かなり高い無色界に生

まれ変わることができる。これは、オウムの言葉を使うならば、コーザル世界だよ。いいですか。

はい。では、第三の道。辟支、あるいは独覚というのはどういう道であろうかと。これはグルが与えた瞑想課題をただひたすら瞑想すると。例えばそれはツァンダリーの瞑想かもしれない。あるいは五蘊の瞑想かもしれない。あるいは十二縁起の瞑想かもしれない。あるいは五根五力の瞑想かもしれない。あるいは五感を滅する瞑想かもしれない。いろんな瞑想がある。それをただひたすら行じ、そして、その人が周りの影響を受けない状態で解脱したと。この状態が辟支の状態であると。

君たちに一つね、プレゼントをしてあげよう。それは何かというと、いいか。オウムの成就をして在家にいるとね、欲界に生まれ変わる可能性が強い。これはわかるか。どうだ。カッサパ、わかるな、理由は。

(マハーカッサパ大師)――。

そうだ。現世の煩惱にまみえて修行してるから徳は積むと。しかし、欲が生起しないかといったら、生起する場合もあると。よって、欲界に生まれ変わる可能性が強い。だから、もし欲界に生まれ変わりたいくないと、色界でも嫌だと、無色界に生まれ変わりたいと。こういう人はクンダリーニ・ヨーガの成就をしたら、だれにも言わないで黙って消えるべきだ。そして人里離れた所で静かにね、涅槃すると。でなかったら、わたし自体はね、今日の最後に説く菩薩の道を君たちに歩かしたいと考えているから、せっかく得た君たちの色界、あるいは無色界に生まれ変わるチャンスだね、棒に振らせるからね。

そして、辟支に至るための瞑想法、これは、来月号の『マハーヤーナ』から、『マハーヤーナ』の中で『阿含経典』の解説を始めるから、その瞑想を一生懸命やればいいと。

そして実はね、オウムの中に三つの修行体系が含まれているのを君たちは知っていたかな。一つは立位礼拝、および極厳修行、あるいは忍辱精進修行、これは独覚の道であると。そして、今日みたいに瞑想修行と関係ない世界観、あるいは真理の素晴らしさを聴くこと、これはこの次に説明する多聞の世界であると。そして君たちの日々のワーク、これは菩薩の修行であると。つまり、君たちはオウムのシッシャとして頑張っている限り、絶えず三つの修行をしているんだと。しかもそれは一定の期間必ず修行できるという素晴らしい功德を君たち

が持つてゐるわけだね。

はい。話は元に戻そうね。よって独覚というのはね、意志の力さえ強ければそんなに難しい成就ではない。またグルの教えをね、さえ着実に実践すれば必ず独覚、この成就はあり得ると。そう考えましょう。いいね。(サマナたち) はい。

では次は多聞だ。このいったい多聞の修行とは何だろうと。多聞の修行とは何だろうと。多聞というのは大いにわたしの講話を聴き、君たちの場合だよ、そしてそれについて考えろ。これが多聞の修行であると。ではいったい、多聞の修行はどういうメリットをね、君たちに与えるだろうと。マハーナーマ、どういうメリットを与えるか。

(マハーナーマ大師)――。

そうだ。多聞のメリットというのは他人に真理の法を説くことができるようになる。しかし、神通がないとね、的外れの説法をしてしまう可能性があるから、そこはね、神通をつける修行もしなければならぬ。いいね。そしてこの多聞の修行はもう一つ君たちにメリットを与える。それは。じゃあ、もう一回カッサパいこうか。

(マハーカッサバ大師)――。

そうだね、そのとおりだ。よってこの多聞の修行者というのは救済活動向きということになる。

では、次は菩薩の修行とは何だろうか。菩薩の修行というのは、自己の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとすると、いうことがもともと菩薩の修行の根本なんだ。ではそれはいったいどういうことなのかというと、徹底的な利他心、他を利する心を持つと。

はい。今日は新しいことを一つ加えようね。この菩薩にも二つあってね、タントラの菩薩とそれから大乘の菩薩、二つあるんだよ。では、ウッパラヴァンナー、タントラの菩薩と大乘の菩薩、これはどう違うんだ。

(ウッパラヴァンナー大師)――。

ヴァンギーサ、どうだ。

(ヴァンギーサ大師)――。

ティローパはどうか。

(ティローパ大師)――。

はい。ええ、その二番目のね、タントラの菩薩と大乘の菩薩のタントラの修行をする菩薩と、大乘の修行をする菩薩というのがあったけども、それはどのように違いますか、具体的に。

(ティローパ大師)――。

そうですね。もう少しつけ加えよう、それについて。大乘の菩薩というのはね、根本的になつてゐるものは善が背景なんです。善というのは善きこと。しかもそれは、自分にもよく他にもいいこと。これが大乘の菩薩の定義なんだね。だから例えば、もし自分に悪く、他人にいい場合、もちろん自分に良く他人に悪い場合は当てはまらないけど、自分に悪く、つまり自己の悪業になり、他の善業、他を利する場合というのは大乘の菩薩は、そういう行動をとらないんだ。

ところが、タントラの菩薩というのはね、自己は悪業を積むことになると、しかしそれが、他に対して利をなすならば、それを最高の実践課題とするわけだ。

ではみんなに聞こう。なぜタントラの菩薩というのはその実践を行なうんだ。そして、なぜその方が早く成就するんだ。どうだ。じゃあ、カッサバ、もう一度いこう。

(マハーカッサバ大師)――。

ブンナはどうか。

(ブンナ大師)――。

ん？ はい。人の心の働きをよく考えてみよう。例えば、いいか。悪い世界へ行きたいと、苦悩の世界へ落ちたいと思う心があるだろうか。どうだ。それを知つていてあえて行なう、そのときの心の強さ、この人の心の成熟の状態というのは、いかなるものだろうか。どうだ。それに比べて、ただ単に善を行なうと。これは、他に対する利益でもある、例えば肉体を供養するときもね、その肉体を供養することによって、例えば発

願し、未来において仏陀になりたいと発願すると。これは素晴らしいことだ。しかし、いいかな。そのときは自分にもよく、他人にもいいわけだね、どうだ。

しかしここにタントラの菩薩がいて、このタントラの菩薩というものは、自分に悪く、他にいい修行をしている。例えばここでこれをなすならば、せっかく自分の持っているエネルギー、あるいは、せっかく自分の積んできた功德が台無しになってしまう。しかし、それでも他に対して他を利用するためにそれを行なうと。どちらの方が心が強く、そしてどちらの方がね、本当の意味での愛を持っているだろうか。どうだ。わかるかな、言っていることは。

(サマナたち) はい。

マンジュシュリー、まとめてみる。

(マンジュシュリー大師) ——。

はい。でもそこで一つ矛盾があるよね。だって高い世界へ生まれ変わるために修行してるんじゃないかと。この質問に対してはどうだ。

(マンジュシュリー大師) ——。

マイトレーヤ、どうだ。

(マイトレーヤ大師) ——。

そうだ。それも一つはあるかもしれないね。ケイマはどうだ。

(ケイマ大師) ——。

仏陀の定義を考えてみようじゃないか。仏陀の根本というのは大慈、大悲じゃないか、どうだ。大いなる愛、大いなる哀れみじゃないか、どうだ。たとえ、悪い世界へ落ちたとしてもそれがすべての魂のためになるとするならば、もうすでにそれは仏陀の心の、その人の心の中に仏陀の種子が蒔かれているという答えにならないか、どうだ。

たといいったん低い世界に降りたとしても、そんな低い高いというのは、一時的な現象ではないか。最終的

な絶対的な世界に入るためには、高い世界低い世界関係ないわけだね。つまり、その途中のプロセスは関係ない。だからたとえ地獄に落ちようと餓鬼へ落ちようと、そんなのはどうでもいい。大切なことは最後の瞬間なんだね。いかに早く、そしていかに多くの人を救済できるかと。そして自分自身がいかに早く本当の意味での慈悲を身につけることができるかと。どうだ。それを考えたならば、大乘の仏陀とタントラの仏陀ではタントラの仏陀の方が当然早く心は成熟するよね、どうだ。そして、これがだぞ、ポイントは。タントラが早く仏陀になる意味なんだよ。

今日は、五道そして三乗を説いたけども理解できたかな、みんな。そして、五道、三乗があるということは、いかにこの五道、三乗が難しいか大変であるかということ、これを理解しなければならぬ。そして、日々、集中、精進、功德、ザンゲ、戒、これをね、きちんと守るようにしなさい。いいね。

(サマナたち) はい。

今日は新人シッシャには大変難しい話だったと思う。しかしね、今日のこの説法は、特にね、ブンナ大師の目指している世界、あるいはマイトレーヤ大師、彼らが目指している世界についての今日は話をしたわけですから今日の内容について理解できないとき、ことはね、どんどん大師に聞いて、大師をいじめてやってください。いいね。

昨日は少し難しい話をしたけども、今日は逆にやさしい話をしましょう。

今日は瞑想のプロセスにおいて、まず八正道があると。それは、正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定というね、正念の中の「法は無我なり」について語りたいと思います。

「法は無我なり」と。これはいったい何なのかと。法、これはわたしたちを構成しているもののの中の外的要因である観念ということができると。まず、この観念についてとらえたいと。

ここに、資本主義があったと。そして資本主義は、自己の利益のために金を儲けることが大切なんだと。まあ労働者には、そこそこの金を与え、金を儲けることが大切なんだと。これは資本主義の基本であると。これは、資本主義社会においては肯定されることだよ、どうだ。ではこれがだよ、社会主義社会になったらどうだろうと。もし、そういうオーナーがいたならば、それは労働者から搾取しているということなるよね。どうかな。

(一同) はい。

じゃあ、社会主義社会においてこれは正しいか正しくないかと。正しいとは認められないよね。

ではだ、ここに、盗人がいたと。十年前盗人であったと。この人が発願し、そして修行し、今成就者になったとしよう。いいかな。この盗人という者は、善人であろうか、悪人であろうか。どうだこれは。今の時点では。——しかしもし、わたしたちの心の中に、十年前盗人だったという心の働きがあれば、その成就者に対してどのような思いが生じるだろうか。どうだ。

ありのままに見つめるということは、その点、その時点その時点で正しく見つめるということなんだね。

これは、サリリブッタがよく言っていることなんだけど、心というのは、四つのパターンがあると。まず、以前善き心を持っていた人が今も善き心を持っている場合と。いいですか。第二のパターンは、以前悪しき心を持っていた人が今善き心を持つて場合と。いいですか。第三のパターンは、以前善き心を持っていた人が

今悪しき心を持っているパターンと。いいですか。ということは第四のパターンは、以前悪しき心を持っていた者が今悪しき心を持っている、という四つだね。いいね。

そして、その法無我、観念にとられないことが、わたしたちを本当に自由なものを見方をさせてくれる、わたしたちを正しく、判断に導くための条件であるということ君たちは考えなければならぬ。

例えば、ここに娼婦がいたと。この人はいろんな事情で、例えば肉体を売って生活しなきゃならなかったと。しかしその背景には、例えば子供がいて、養うためには肉体を売らなかつたんだと。じゃあこれは善行といえるだろうか、悪行といえるだろうか、どうだ。——どうだ。——どうだ。

「善行」と言った者は無智であると。「悪行」と言った者も無智であると。正しく見つめるならば、子供に対して、例えば、親の愛情によって養いたいという気持ち、これは善の部分といえることができる。しかし、例えば肉体を、そのために楽をしようとして肉体を売ると。これは悪行といえることができる。だから善と悪というものは両方存在しているんだということだ、例えば。

では例えば、ここに悪い友人があつて、いいかな、その悪い友人が盗みを働いたと。それを見た人間が追いかけていったと。そのときケガを負わせてしまって、そして警察に捕まったと。これはどうだ。——善業を、ケガをさせた人はなしたといえるか、悪業をなしたといえるか。どうだ。——ね、悪業をなしたとか善業をなしたと言ったら無智だと言われるからね。なかなか答えらんない。これは、例えば傷をつけたわけだから、法律的には悪といえる。しかし、心の働きとしては善といえる。

例えば、いいかな、ここに、悪いことをなして大金を持っていた人がいたと。その人のことをよく知っている者が、「あの人は来世餓鬼道に落ちる」といって、こっそりそのお金を盗んだと。そして、例えば真理のために、例えば貧しい人のために、そのお金を布施したと。これはじゃ善業といえるだろうか、悪業といえるだろうか。どうだ。——どうだ。

これは完全なる善業といえる。なぜならば、心の働きの中に相手を害そうという気持ちがないからだ。そして相手を高い世界へ至らしめたいと。

実は、今日の話は、最も難しいタントラの話なんだよ。だからわかりづらいんだね。だから、タントラというものは深遠であるといわれてるのはこういうことなんだ。例えば、大乘の、あるいは小乗の教えの中の十戒に「盗むなかれ」というのがある。しかし、今のような心の働きというのは、例えば肯定されると。これがタントラの教えなんだね。

じゃあ、わかったと。今日から物を盗もうと。今日から、例えば人を痛めつけてやろうと。このように考える人は、どうだ。——無智だ、そのとおりだ。では、どのような状態になったら、この実践を行なってもいいと思うか。——ありのままに見つめる力がついたときということになるね。

例えば、ここに人がいたと。この人は大いなる救済を実行してとしよう。そしてこの人は、さあ徹底的に例えば金を集めてやるぞと。徹底的に人を集めてやるぞと。そう考えた。例えば徹底的に金を集める、徹底的に人を集めると。これは、心の働きとしては貪りになるだろうか、ならないだろうかと、どうだ。来ても来ても、集まっても集まってもそれに飽き足らないと。どうだ。——当然この人は貪りのカルマを受けることに

(マハーカッサパ大師)――

（サラスヴァティー大師）――。

(サラスヴァティー大師)――

本来、嫌悪というものは、個に向けるべきではないんだね。だからツアンダリーの瞑想のときに、もつと大きなものを、「なぜすべての魂は真理に気づかないんだ」と、あるいは、真理でないものに対して絶えず嫌悪すると。このような心の働きを持つならば、真理以外のものが近づかなくなると。

では、無智の使い方はどうだ。ミラレパ。

それは無智を使った修行になるか？ だれかいるか。
(シッシャ)――。

うん。なかなかいい答えだと思うね。無智の使い方というのは、例えば修行者というものは、個々のステーションにおいて真理というものをある程度持つているよね。これはどうだ。ということは、真理にとらわれてしまふならば、例えばその真理の、自己の今まで経験した、学んだ真理によって判断をしてしまふと。どうだ。ところが、例えばタントラの修行というものは、グルに対しては絶対的な信とか帰依を培うわけだね。その背景となっているものは無智なんです。――だから、逆の言い方をするならば、タントラのグルというのは大変危険な立場にあると。それはどういうことかという、もし弟子を正しくない方向に導いたならば、それは自分ですべてのカルマを受けなきゃならないから。

そして、法無我の話から、ここまで発展してしまった。ということは、心無常、あるいは、受苦ね、受は苦なり、あるいは、身不浄、身はけがれているという話も、大いに発展させ、瞑想することができるといふことだね。

ただだよ、今わたしの話したことは一通り小乗の修行ができ、ものをありのままに見つめる訓練ができてきた段階で消化しなければならぬ内容であると。

最後に。ここにお金持ちの息子がいると。その息子は一見、行動は法になつていて、正しいように見えるでしょう。あなた方はこの人を信じるであろうか、信じないであろうか。どうだ。――どうだ？ この人に対しては、信じることをしてもいけないし、信じないことをしてもいけないと。話してみると。そして、この人に対して結論を出す時期というものは、その人の言っている口の行ない、身の行ない、これが同一であるかどうかを確認することなんだね。わたしたちが、力のないわたしたちがね、確認するただ一つの方法というのは、相手の言っている口の行為と行動とが一致するかどうかなんだ。

ではもう一つ質問しよう。ここに、ボロボロの衣をまとった者がいるとしよう。この人は、大変口が悪いと。この人を君たちは信じるか信じないか、どうだ。――これも、同じように信じることもないし、信じないこと

もないと。同じように、口の行と、身の行とを比較してみると。一度二度、口と身とがずれるとするならば、三度もずれる確率は大変高いということだね。そして、慈悲というものは、その相手の状態をありのままで見つめた、それを含んで相手を認めてしまふと。そして例えば、だまされることも含んで認めてしまふと。そして相手を教化育成すると。これが本当の慈悲なんです。

今日は法無我の話をしたけども、今日の話をよく、もう一度かみしめてほしい。そして、この三乗の教えというものは、本質的には一つである。何だかわかるか、一つというのは。それは、わたしたちも含めたすべての魂の心を成熟させ、幸福にすることであると。そして、ステージによってその戒律が違ふんだと。いいかな。――元気がないじゃないか。理解できなかったか？ どうだ。みんな理解できたかな？

(一同) はい。

はい、あの今ね、大師方が、少しずつ少しずつ教学をしよう、学ぼうとしてきてるから、わたしも、徐々に徐々にタントラの話、大乘の話、道の話が始めた。君たちが日々、性欲・食欲、あるいは嫌悪・現世的執着といったものを捨てね、「わたしは説法が聴きたいんだ」と、「わたしは法を学びたいんだ」と、「法を実践したいんだ」と、一日何回も何十回も求めるならば、もっともっとわたしの説法の時間も長くなり、そして君たちが求めている内容を話すことになるだろう。

はい、じゃ、今日はこれで終わります。

今、君たちが実践している修行、これは、ある人は大乘の修行であり、ある人は秘密金剛乗、タントラの修行である。もちろん、小乗の上に大乘が乗っかるわけだから、君たちのベースとなってるものは、当然、独覚の修行、辟支仏になるための修行、そして多くの講話を聞き、君たちの心のデータというものを蓄える多聞、この二つがまずベースとなると。そして、四つの無量心を背景として、心から奉仕活動に至ると。

今日は一つ、その中で特に大切な大乘の功德について話そうと考える。はい、一緒に考えようね。ここに奉仕活動を一生懸命行なっている者がいたと。ま、オウムでワークといわれていることだ。この人は心の中では否定的な想念を持ち、そして口においても否定的な言葉を発している。しかしワークは一生懸命行なっている。としよう。君たちはこの人は、どのような功德を積んだことになると思うか。どうだ。ん？ 身の行ないの功德。

この人は、どのような、ではね、その功德の返りがあると思うか。果報があると思うか。どうだ。サラスヴァティーどうだ。——アポロン、どうだ。

身の功德というものは、何に対して影響があると思うか。——身の功德というものは、色に対して影響を施すね、一般的には。だから、身の功德を積んだ者は、例えば来世において美しい顔形で生まれるだとか、あるいは食べ物に困らないだとか、あるいはその人に仕える部下がよく働くといった功德を得ることができると。では、この身の功德を積んだ人は解脱を思うか、どうだ。——なぜしないと思うか。マンジュシュリー、なぜだ。

(マンジュシュリー大師)——。

身の功德で解脱しないと、大師が言ったわけだけど、なぜしないと思うか。——これは正しい。

(シッシャ)——。

よし、いいだろうまあ。身の功德というものは、先程言ったとおり現象界に対して対応していると。色に対

応していると。よって、例えば食べ物豊富だとか、あるいは仕え手がよく仕えてくれるだとか、あるいはいい家に住めるだとか、そういうものに変化して功德が返ってくるわけだ。

では次にだ。ここに修行者がいて、この修行者は口清く、行為も清らかであると。しかし、心の中は絶えず否定的な想念、あるいは現世的な想念を持っていたとしよう。この修行者はどのような恩恵を受け、あるいは解脱に対してはどのような結果を招くことになるだろうか。どうだ。アポロン、どうだ。——マンジュシュリーはどうだ。——カッサパはどうだ。

(マハーカッサパ大師)——。

そうだね、他人から優しく、優しい言葉をかけられると。静かな環境であると。しかし、周りの人は心に毒を持っているかもしれない。そして豊かな生活であると。これは、現代の例えばね、徳があつて社長になつていつてる人たちがそのパターンじゃないかと思うね。部下はよく仕え、そしてその長に対しては丁寧な言葉を使う。しかし心はいつかは蹴落としてやるぞと。あるいは心は否定的な想念に支配されている。そのようなかたちになると。ということだ、解脱はどうだ。

解脱の本質というものは何かというと、心から解脱することなんだね。心から何が解脱するんだといったら、真我が解脱することなんだ。では、心から真我が解脱するというのはいったい何かというと、それは心と真我とを結びつけているプラナをね、ちょうどここにミルクがあつて、ミルクをかき混ぜたらどうなる、どんなにかき混ぜていたら。マンジュシュリー、どうなるか。

(マンジュシュリー大師)——。

全部がバターになるか。——ね。バターと水とに分けるようなもんなんだね。真我と心とを分ける作業、それをミルクの状態にしてるのはプラナなんだよ。ということ、身の行ない、口の行ないだけではなく、心を絶えず浄化すると。だから、修行の根本的なものの一つには布薩があると。布薩っていうのはザンゲだね、要するに。そして、心から供養する瞑想があると。

よってだ。君たちがワークのとき、もし心・口・身体、この三つを絶えず供養し、そして浄化するような行

動をとるならば、君たちの解脱は早いといえる。

ではだ、シッシャ諸君に聞こう。ここに入りたてのシッシャがいたと。このシッシャは信徒としてもそんな長くないと。教学もそんなに進んでないと。しかし、オウム真理教のシッシャ、なんとなくつかっこいいなと思つて入ってきたと。こういう人に対してはどのような対応をすればいいか。どうだ。カッチャーヤナどうだ。——どのようにしたら磨くことができると思うか。どのようにしたら磨かせることができると思うか。ヴァンギーサ、パタンジャリ、どうだ。

心を磨くための材料、それはデータだね。どのようにしたら心を磨くことができるかというデータ。だからそのためには、あなたの方のまず第一の修行は多聞である。できるだけ多くの説法を聴きなさいよ。そして、例えば真理に対して疑問があるときは、疑問というのは、「このように言われているけど、その真の意味はいったいどういうことなんだろう」と、「これはこのように書かれているけども、真はいったいどういう意味なんだろう」ということを聴きなさいよ。そして、わたしにわかることだったら当然それはお答えしよう。

これを、先輩のシッシャ、あるいは大師が指導するならば、その新人シッシャは少しずつ真理というものを背景に心を見つめるようになるから、どうだ、心の否定的要因というものはどうなるか。——当然消えていくよね。ところがだ、ここに無智のシッシャがいたと。先輩シッシャがいたと。この先輩シッシャがあとから入ってきたシッシャの現世的な話、あるいは無智の話、あるいは否定的な話に乗っかって、「実はわたしもそう思っているんだよ」と、「わたしも苦しんでいるんだよ」と、「わたしもつらいんだよ」と、「わたしもわからないんだよ」と、このような状態になったらどうなると思うか。——悪い連鎖反応が起き、無智が増大されると。どうだ。そしてそれが今のオウムだとわたしは考えてるんだよ。

真理を根本としなければならぬ。真理を依処としなければならぬ。そのためには、真理をたくさん学ぶこと、理解すること、実践すること、そして宣布することが必要なんだよ。

もう一度言うよ。まずたくさん聴きなさいと。次はそれをたくさん学びなさいと。そしてそれを実践しなさい

いと。そしてそれを宣布しなさいと。そして君たちが最高の英雄であることを理解しなければならぬ。

人間は徳を積んだらどうなるかと。まず四天王衆天に生まれ変わると。次は三十三天に生まれ変わると。夜摩天に生まれ変わると。そして転輪聖王として生まれ変わると。そして最終的にはだよ、君たちと同じような真理の実践者、真実の修行者として生まれ変わると。

もしそれが理解できるならば、現代、ほとんどが三悪趣であると。ほとんどは地獄・餓鬼・動物であると。それを考えると、「あ、また一つ、地獄・餓鬼・動物のカルマを持っている者が入ってきた」と、そしてこの地獄・餓鬼・動物のカルマを持っている人の内側には、光り輝くダイヤモンドのような解脱できるカルマの持ち主が入ってきたと。「わたしはこの友をね、地獄や餓鬼や動物のけがれから守ってあげよう」と。「わたしはこの友を地獄・餓鬼・動物の苦しみから解放してあげよう」と。「わたしは先輩であり、多聞であり、多聞を理解する者であり、多聞を実践する者であり、多聞を宣布する者だからだ」と。

もしあなたの方がそう考えて実践するならば、無智から解放され、素晴らしい方向に真理は向かうだろう。しかし例えば、綺語を話し、両舌を話し、悪口を話し、心には貪りの念を持ち、嫌悪の念を持ち、そして無智を喜ぶと。もし先に修行してる者が、先輩方がね、あるいは大師がそのような愚鈍な、魔に負けた心の働きに支配されるならば、この末法の世を正法の世に切り換えることはできないだろう。

それができるかどうかは、君たち一人一人が一日一秒をね、瞬間瞬間をいかに大切に生きるかだ。ここに真理があると。ここに真理の法があると。それを学ぶと。そして実践すると。そして宣布すると。そのような気持ちで君たちの中に存在してるかどうかだ。

そして、それこそが大乗の菩薩である。大乗の菩薩がこれだけの大変なカルマをしょっているということは、タントラの菩薩はいったいどの程度の大変さがそれに加わるのだろうか。秘密金剛乗の菩薩はいったいどの程度、どれほどの、凡夫から見たら、苦難の実践があるのだろうか。

タントラの条件は、自己の身体、自己の言葉、自己の心というものを踏み台にして、多くの人を高い世界へ引き上げることなんだ。タントラの菩薩の心構えというものはね、日々、いつ肉体を供養しようかと。いつ言

業を供養しようかと。いつ心を供養しようかということなんだね。

ではいったい肉体を供養するってのは理解しやすいと。しかし、言葉を供養しようってのも理解しやすいけども、しかし心を供養しようってのはなかなか理解しづらいと。要するに心には名譽欲、あるいは権力欲といった欲望があるだろうと。その欲望を意図的につづす時期をいつにするかと。自己のそういう名譽的な働き、あるいは権力的な心の働きのいつ供養するかと。つまり言い方を換えれば、いつ悪者になるかということだね。身体・言葉・心、この三つをいつ供養するかと。これを日々考える、これがタントラの菩薩の生き方なんだ。もちろん、先程言ったそのベースには多聞、そして多聞の教えを学ぶ、記憶する、そして実践する、そして宣布するということもあるよ。しかし、それとは別の心の働きとして、いつ自己の、その煩悩性の心の働きの供養するかと。口の働きの供養するかと。

例えば、ここに法友がいると。法友が正しくない行為をしていると。それを例えば罵ると。罵るということは悪口につながるから、これは悪業であることとはわかっていても意図的にやると。これがタントラの菩薩の生き方なんだ。つまり自己はその悪口のカルマをしよう。しかしそれによって法友が成長するならば、あえて悪口を行なうと。悪口を行なうと。あるいはここに法友がいると。その法友が正しくない行為を行なうと。それを大師に上げると。これは一見両舌に見えらる。気づかれたら、その法友は二度と口をきいてくれないかもしれないと。しかし、その法友に対して慈悲の心を持つと。これがタントラの菩薩なんだ。これを口を供養する。口を供養するというんだね。口業を供養するというんだよ。

身体も同じだ。いつこの肉体を供養するかと。例えば国家的な弾圧が真理に対して向けられると。そのときに自己の肉体が投げ出せるかと。例えば真理を弾圧する国家にとって、真理というものは当然邪法だろうから悪人呼ばわりされるだろう。その上に身体が傷つき、あるいは生命を捨てなきゃなんないかもしれないと。それに対して平気で捨てると。これが身体を供養するタントラの道と。

大乘はね、端もその身体を捨てることで称賛する。しかし、タントラは端も称賛しないと。しかも身体を捨てると。そしてその背景にあるものは大きな愛、大きな哀れみ、そして、すべての者が善行を積むことを誉め

称える心、そしてありのままに見つめる、この四つの無量心なんだ。その心の成熟のために自己を捨てる道、これがタントラだ。

ね。そしてオウム真理教は三乗を説いている。一つは多聞、辟支、あるいは独覺といった小乗の道、一つは大乘の道、そして一つはタントラの道であると。今日この瞬間を境に、身・口・意、三つの善業を積み、そして新しく入ってきた者たちに対して、君たち先輩が正しい道を示す。これを心がけてほしい。

今日、一人のシッシャを破門した。その破門した理由というのは、そのシッシャの存在によって二人のシッシャが巻き込まれ、そして、三人で昨日の朝三時にオウムを勝手に抜け出し、で、自宅へ帰ったと。で、信徒としてやらしてくださいと。それで大師の方から連絡をしてもらい、呼んでね、その中心の人を破門した。

まず、君たちに聞きたいことがあるんだけど、いったい信徒とは何であるかと。あるいはシッシャとは何であるかと。どうだ、これは。信徒とはオウムの教義を理解し、そして現世的な生き方をしながらも、できるだけ真理の実践を行なうと、これが信徒だね。そして、グル、それから大師およびシッシャ、そして真理に対して帰依をし、協力し、救済活動のお手伝いをしていくと。どうだこれは。

では、ここにシッシャがいて、シッシャが帰依をしなければならぬものは、グル、真理であると。もちろん、尊敬できる大師もいるだろうし、できない大師もいるだろうから、一応大師は除外するとして、グルと真理であると。で、この人が自己の煩惱に負け、例えば周りを誹謗、中傷し、そして、勝手に家に帰ると。で、わたしは信徒としてやらしてくださいと言ったとしよう。君たちは、この理論というものは成り立つと思うか、成り立たないと思うか、どうだ。なぜ成り立たないかわかるかな。つまり、信徒の条件の根本というのは、信、信じることだね。どうだ。

ということは、例えばシッシャがシッシャをやめて在家へ帰るとする場合、きちんとそれなりの手続きが必要なんじゃないか。どうだ。信があれば、当然その手続きを踏むだろう。どうだ。信がないから踏めない。では、なぜこういうことが起きるのだろうか。実はその信徒さん方は、その三名のうちの二人は、わたしシッシャ入りを反対した人だ。なぜシッシャ入りを反対したかという、シッシャになってもやっていけないだろうと。この人たちは仕事ができないわけではない。ただ、まだシッシャとしての功德に満ち、功德が足りない。

君たちにもよく話すとおり、シッシャの功德というものは相当に高くなければならない。だから、例えば

この中で揺れている人がいたならば、こう考えなければならぬ。わたしは徳が足りないんだと。そして徳が足りない、これは言い方を換えるならば、信徒として本来やっていくことも難しいと。なぜ難しいんだと。出家して修行をしている者は、ある程度法というものによって、あるいは法友というものによって守られている。しかし、信徒はなかなかそうはいかない。周りはすべて煩惱の世界であると。すべて、エネルギーは下降している世界であると。否定的な世界であると。煩惱を増長させる世界であると。

じゃあ、シッシャをやめ、信徒をやめ、凡夫の生活をしたらいじゃないかと。あるいは、他の教団に布施でもして生きていけばいいじゃないかと。

しかし、ここで一つ考えなければならぬことがある。それは仏典にうたわれている欲六界の構成だ。昼間見える星、そして夜見える星の比喩をよく使うよね。つまり地獄というものは夜見える星の数であると、餓鬼というのは昼間見える星の数であると。次は、餓鬼の数を夜見える星の数だとするならば、動物は昼間見える星の数であると。昼間見える星の数、これを人間だとするならば、動物は夜見える星の数であると。夜見える星の数を人間だとするならば、阿修羅は昼間見える星の数であると。夜見える星の数を阿修羅だとするならば、天界は昼間見える星の数であると。

つまりどういうことかという、この比喩からいくなら、単にね、地獄を十萬と、それから餓鬼を一としよう。マンジュシュリー、ちよつと数えてくれよ。そうすると、餓鬼を十萬と、動物を一としよう。動物を十萬と、これはもちろん、一対十萬の比ということであるから、十萬人という意味じゃないよ。動物を十萬と、人間を一としよう。人間を十萬と、阿修羅を一としよう。阿修羅を十萬と、天界を一としよう。ということは、天界とそれから地獄との比はどうなるか。地獄。一、十、百、千、万、十萬、百萬、千萬、一億、十億、百億、千億、じゅう、ん……。一兆の十倍倍対一の関係と。いや、正確にいうならば、もつともっと大きい広がりがあるだろうと。大きい差が出てくるだろうと。なぜかという、例えば砂丘と一握りの砂とのたとえとかあるからね。

ということは、いかに真理を実践し、そして、この三道、地獄・餓鬼・動物から抜け出すのは大変であるか

と。あるいは、欲界の天界に入るとは大変であるかということになるわけだ。

ということは、このシッシャの生活で苦しいという人は、もう、一度シッシャになりね、シッシャの生活が苦しいという人は、清度されないと。自分自身で、自分を本当に叱咤激励し、自分の魂の浄化を考え、乗り越えようとする者は、清度されないということになると。救済されないということになると。例えば、現世へ帰って苦から解放されたつもりになつてゐるかもしれない。しかし、それはちゃんとつげが回つてくるんだよつていうことだね。

例えば、わたしは寝るときに畳の上で寝るようにしてると。いつさい、何も敷かないで寝るようにしている。なぜ、何も敷かないで寝るんだと。それは、自分自身が修行者であるということを絶えず意識しなければならぬからである。意識しなければ、慢に陥つてしまうと。そして、慢に陥るといふことは徳の消耗が始まることを意味していると。あるいは、先を見なくなつてしまうと。先を見なくなるといふことは、救済者としての、すでに役割の終焉を意味していると。もちろん、わたしが工夫しているものといつたら、その畳だけではなくて、いろいろな工夫を自分の中に凝らしている。そして、絶えず救済を意識できるように、あるいは自分自身が修行者であることを意識できるように心がけている。

わたしですら、自分に対して絶えずそういう心の働きを持っている。ましていわんや、まだわたしよりも修行の進んでいない者は、当然自分自身に注意を払うべきである。わたしの心の働きは修行者として適当だろうか。わたしは三悪趣に生まれ変わるための道を歩こうとし出してるんではないかと。わたしは小さな世界中でうめはれてゐるんではないかと。あるいは、わたしの言葉はわたしの法友たちに害を与えるような言葉ではないかと。わたしは周りの人たちがちゃんと修行できるように応援をしているだろうか。わたしは周りの人たちの心を否定的にするような言葉を吐いてはいないだろうか。このようなことを日々考え、逆にすべての人が修行に向かうように、すべての魂が苦悩の世界から脱却できるように祈り、修行を続ける。これが麻原の弟子の役割である。

心は無常である。無常なるがゆえに、今まで善き心を持っていた人が、法友、悪い法友の影響によって悪し

き心を持つ。逆に、今まで悪しき心を持っていた人が、心は無常、心は無常なるがゆえに、善き心を持つ。

そして、君たちが交わらなければならないもの、君たちが絶対的根本としなければならないものは、グルである、法である。それ以外のものを、絶対的な根本としてはならない。なぜならば、絶対的な修行の道、絶対的な救済の道を絶えず志向している、これがグルであるからである。あるいは、法、真理というものは、君たちの心を浄化し、君たちを欲界から、あるいはブラフマンから、あるいは光音天から解放し、マハー・ニルヴァーナへの道を指し示してくれるからである。

なしたことを以外返つてはこない。なさなかったことを要求するのは、お金のない者が金持ちの生活を羨望するのと同じである。わたしのように、絵の全くかけない者が、「ああ、ああいうまい絵をかきたいな」と考へるのと同じである。すべてはなしたことを、努力したこと以外返つてこないんだということを意識しなければならない。はい、この話についてはここで終わろう。

次に、簡単にね、三乗について説明しよう。ここでいう三乗とは、タントラヤーナ、マハーヤーナ、ヴァジラヤーナのことである。

まず、タントラヤーナというのは、わたしたちの最も低い次元のエネルギーの一つである性エネルギーを上昇させるための修行である。わたしたちは、ラージャ・ヨーガによって、すべての煩悩を否定し、ラージャ・ヨーガの成就をすることができる。しかし、オウム真理教のように救済というものを根本として修行する教団にとつては、ラージャ・ヨーガでは大変もろい。したがって、現世にまみれながら、例えば煩悩に巻き込まれながらも、それを、エネルギーを回復し、救済活動をなすような修行法が必要であると。これが、タントラヤーナである。

しかし、タントラヤーナというのは、現代のモラルに合わない。例えば、政治倫理が説かれている現代、例えば教祖の女問題が取りざたされる現代、タントラヤーナは合わない。

次はヴァジラヤーナであると。わたしたちは、わたしたちを構成しているもの、身・口・意の三つを浄化しなければならぬ。つまり、身の行ないと、言葉と、それから心の働き、これを浄化しなければならない。

かし、あまりにもカルマがけがれている場合、例えば殺生の罪がわたしたちの体を覆っている場合、わたしたちはなかなか身の行ないを浄化することはできない。また、日ごろから口のカルマを積んでいる者が、口のカルマを浄化するという事はなかなか難しい。心については、瞑想をさせることによって浄化することができる。

ヴァジラヤーナの基本は、グルが弟子に対して、そういった行為のカルマ、あるいは口のカルマといったようなものを逆に落としてあげる、これが原則の修行法である。

そして、マハーヤーナであると。マハーヤーナの修行は何かといったら、四つの無量心であると。四つの無量心とは、愛、哀れみ、そして平等心、それから相手を心から誉め称えることの修行である。そして、近代のチベットの修行は、マハー、タントラ、ヴァジラヤーナ、大乘、そしてタントラ、そしてこの金剛といった三つの修行を兼ね備えているといわれている。しかし実際は、先程も言ったとおり、この条件を満たしている者が少ないわけだから、だからチベットは滅んでしまった。

君たちが意識をしなければならぬこと、それはまず自己のステージであると。自己のエネルギーの状態であると。自己の心の状態であると。こういうものに絶えず気を遣い、そして、自分はまだまだであると、絶えず考えることであると。絶えず考え、絶えず浄化し、絶えず実践するならば、当然最終地点であるタントラヤーナ、あるいはヴァジラヤーナ、あるいはマハーヤーナに入り、大乘の仏陀としての完成をなすことができる。ろう。しかし、見よう見まねで、自分はタントラを歩いているんだとか、あるいは、自分はヴァジラヤーナを歩いているんだとか、あるいは、自分はマハーヤーナを歩いているんだとかいったような錯覚に陥ったならば、それは致命的な修行者としての、致命的な落とし穴に落ちることになるだろう。

では、タントラの条件とは何だと、あるいはヴァジラの条件とは何だと、あるいはマハーの条件とは何だと。まずタントラの条件とは、いかなる下降のエネルギーを吸収したとしても、即それに対して対応し、エネルギーが上昇できると。つまり、エネルギーが落ちないことが条件であると。そして、第二には、完全に感官の制御、つまり味覚に対してもそうだし、例えば触覚に対してもそうだし、すべての感覚に対して、心を切り離

すことができるということが条件であると。そして、三番目には、いっさいの執着を離れていること、これが条件であると。ただ、心の中には、すべての魂の清度があると、これが条件であると。

じゃあ、次はマハーの条件に入ろうと。マハーとは四つの無量心が根本であると。すると、まず何が第一にくるか。それは平等心であると。平等心とは何か。すべてのカルマの状態を知り、そのカルマにおいて平等な心の働きをすること、これが平等心であると。そのカルマにおいて平等という意味合いは、自分自身もその中に含まれている。ということ、すでに彼らは、その発覚の発端をなした人に対して批判をしたということによって、まず自分自身の魂の状態が理解できていない。

なぜならば、修行者の第一条件はザンキの念だったよね、どうだ。自分のなした行為に対して、あるいは自分のなした口業、口に対して、口のカルマに対して、あるいは心のカルマに対して、絶えずザンゲをすること。心を絶えず悔い改めると。これが第一条件であると。すでに第一条件を見失っていると。

じゃあ、なぜそれで戯言なんだと。それは、膨大な功德があったから、クンダリーニ・ヨーガの成就をしたわけであると。膨大な功德の行き先は、そして欲望を持った人の行く先は、戯言という天界であると。戯言という天界とはどこかという、君たちのよく知っている欲六界の中の最高位に属する、四天王衆天から他化自在天に至るまでの天界であると。

では、次にマハーの愛とは何だと。これは先程言った、すべてのカルマというものを正確に見つめ、そして、それをもとにすべての人に対して慈しみを持つことであると。慈しみとは何だと。「ああ、この魂が、あるいはその魂が、あの魂が、自分の知っている、あるいは自分の知らない、すべての魂が今の煩惱から脱却し、そしてマハー・ニルヴァーナに入りますように」と。「早く無智から脱却し、この世が苦悩であるということ、を悟り、マハー・ニルヴァーナに入りますように」と。これが、愛の真の意味合いであると。そして、そのためのお手伝いをする。

では、哀れみとは何だと。これは、すべての苦悩に対して、すべてのものの苦悩に対して、先程と同じように平等心を背景とし、「ああ、あの人はこのカルマによって今苦しんでいる」と。「かわいそうだな」と。その

背景にあるものは根本無智であると。「早く根本無智から脱却しますように」と。「ああ、あの人は根本の怒りによって今苦しんでいる」と。「かわいそうだな」と。「早く根本の怒りから脱却しますように」と。「ああ、あの人は、前生においてこれこれの悪業をなし、それによって貪りのカルマが生じ、その貪りのカルマによって現在苦しんでいる」と。「かわいそうだな」と。「早くその貪りのカルマが消滅し、脱却し、そして、最後にはマハー・ニルヴァーナに入りますように」と、気づいたよね、君たちは。

つまり、初めの愛と二番目の哀れみというのは表裏の関係であるということだ。そして、その背景にある平等心。これ三つを合わせるとどうだ。三つでセットと。四無量心といいながら、この三つは切っても切り離せない関係にあると。だから、一つということができると。

そして、四番目の誉め称える訓練と。これは、心を、器を大きくしていくと。「ああ、あの人がこれこれの善行をなし、これこれの修行をしている」と、「素晴らしい」と、「あなたは素晴らしい」と、「どんどん修行しましょう」と、勇気づけると。そして、このように勇気づける人は、高い世界へ生まれ変わる条件を備える。なぜならば、すべてはカルマの法則によって成り立っていると。ということは、どうだ君たち。そういう誉め称える訓練をする人は、周りに誉め称える訓練をしている人が集まるんじゃないか、どうだ。

よって、絶えず誉め称える訓練。しかしだよ、これは相手のカルマを見切らなければならないという一つの条件があると。なぜならば、もしここで誉めることによって相手が慢に陥るとしよう。それは誉めてはならないだね。もともとマハーの意味合いというのは、すべての魂の昇華・解脱、そしてマハー・ニルヴァーナに至らせるということが狙いだから。だとするならば、誉め称えるべきでないときは沈黙をする。

これをよく、わたしは大師やシッシャを見て、「ああ、正しく使っていない」と思います。その理由というのは、誉めるがために増長に陥ると。増上慢に陥ると。そして逆に、その裏返しである卑屈さを増大させる。

とおや、ということとは、このバックボーンにも四つの無量心があるなど、の中の平等心があるなど。いや平等心だけではなくて、まず平等心があって、心の働きとして愛と哀れみがあって、この愛と哀れみというも

のが完成された段階で、本当の意味での誉め称えることができるんだと。つまり、本当に深い心の状態で他に対して誉めると。その深い心とは、愛であり哀れみであると。つまり、すべての魂がマハー・ニルヴァーナに入りますようにという心の働きで誉めると。これがマハーの意味合いであると。

じゃあ、次はヴァジラとは何だと。金剛の心を持たせるためには、金剛の口を持たせるためには、金剛の身体を持たせるためには、わたしたちのカルマのけがれというのを取り除かなければならない。例えば、A君がB君を殴りつけたと。このとき、B君の今までの殺生などのカルマがA君に移行すると。そうすると、そこでA君はいつそう暴力的になり、そして身体を痛め、解脱に対する道筋が失われるようになります。例えば、A君がB君を罵倒したと。そうすると、今までのB君の口のカルマがA君に移行し、A君のアストラルはけがれ、そして本当の意味での神聖な、清らかなヴァイブレーションのマントラが唱えられなくなると。

しかし、ここで問題になってくることは、なぜA君がB君を罵倒しなければならなかったかであると。もし、A君の心の働きの間にB君を本当に真理に目覚めてほしいと、本当に真理の実践をしてほしいという心があつたならば、例えば暴力を振るったり罵倒したりしたとしても、A君の心は成熟するであろうと。もちろん、身体を痛めたり、あるいはアストラルを痛めたり、ケガしたりするかもしれない。しかし、少なくとも心は成熟するであろうと。なぜならば、A君は自分のなした行為、例えば殴ると、この行為によって自分の身のカルマはけがれると、例えば罵倒することによって口のカルマがけがれるということを知っているからであると。知っているというのは、頭の中で知っているだけじゃなくて、実際に経験しているからであると。しかし、もしA君がここでB君に対してそれを行わなければ、B君は地獄へ落ちてしまうだろうと。A君がそう考えたならば、これぞヴァジラヤーナであると。

しかし、もう少し深く検討を進めるならば、ここでA君の行なった行為によって、A君が修行できなくなつたらどうだろうと。逆にA君が本当の意味で地獄に落ちたら、落ちるカルマを持ったらどうだろうと。心が成熟し、そして地獄へ落ちたとしても、それは大した問題ではないと。しかし、身・口のカルマが重たくなりすぎて修行できなくなつたならば、A君と縁のある者が当然修行できなくなると。よって、これも正しい選択で

はないと。

つまり、ヴァジラヤーナの条件、これは身、それから口のカルマから完全に解放されてることであると。何が解放されてるんだと。心が解放されてることであると。そして、ここ、心の解放されていない者は、これを行なつてはならないと。そして、そのための土台、そのためのというのは、ここでのいうのは、先程言った三つのヤーナだね、つまりタントラ、ヴァジラ、マハーという三つのヤーナ、この三つのヤーナの土台は何だと、これは布施・持戒・忍辱・精進、そして瞑想・智慧であると。これらの六つの極限、これこそが三乗の土台であるということを理解しなければならぬ。そうすると、初めの戯忘天人とは何かと、この第二番目の布施・持戒の持戒で、すでに落ちてしまっていると。

じゃあ、ヴァジラヤーナの、巻き込まれる、暴力によってね、自己のなした暴力によって、あるいは悪口によって、あるいは両舌などによって巻き込まれると。これは何だと。これは、もちろん持戒、これも絡んでるね。そして、アストラルや、あるいは身の苦しみ、これに耐えらんないという、忍辱ができてない証拠である。これらのすべての条件を備えたとき本当の意味でのタントラ、あるいはヴァジラ、あるいはマハーといったヤーナ、これが実践できるんだということを理解しましょう。

第九話 (一九八九年九月十二日 富士山総本部)

仏陀が、あるいは偉大な菩薩が法を説くとき、二つの時期がある。その第一の時期は、弟子たちが真理を心から追い求め、その法を聴きたいと。これを「求められて説法する」という。第二の、法を垂れるときの時期は、弟子たちがどんどん下に落ちていき、そして、この期を逃してしまったならば、多くの弟子たちが真理から逸脱するだろうと、落ちてしまうだろうというときの説法である。これを「歯止め of 時期の説法」という。そして今日の講話は、その第二のパターンに当たる。

今月の初めから今まで、わたしの知る限り、二名の破門、そして五名のシッシャが落ちていった。

言葉について、まあわたしは、今東京と富士を歩き来してるわけだけど、言葉についてよく近ごろ瞑想してるんだけどね、なぜ落ちていったといえるんだと。落合、なぜ落ちたといえるか。隅田はどうだ、それについて。隅田、どうだ。

(隅田) 本来シッシャとして解脱を目指すという求道心を失って、迷いの生に戻ってしまうという意味で落ちたといえるんじゃないかと思います。

(尊師) 堀田さんはどうだ。

(堀田) はい。真理に巡り合っているという、高い世界へ向かうとしている者が、現世にまみれるという、低い世界に向かっていってしまうので、やはり落ちていってしまうという表現になるのだと思います。

(尊師) 落合君、隅田君、堀田さんの三人の解答は五十点だ。

では、なぜ五十点だと。それは、今の瞬間しか見ていないと。わたしが、ま、ここでは脱走したとか、いろいろ話があるけども、大変ナンセンスな言葉の使われ方をしてると思うんだね。そしてこの言葉というものは、大きな意味合いがあり、そして大きな含みがあると。

なぜわたしが落ちるという言葉を使い、みんなが脱走するという言葉を使ってるかと。この言葉をよく考えてみよう。

まず脱走するという言葉から検討すると、脱して逃げると。あるいは脱して走ると。つまり、ある力によって制約されているものが、そこから逃げ出し、解放されると。これが脱走の意味合いである。

しかし、例えば今月の初めから今までを見てわかるとおり、オウムは何ら外的な力を加えてはいない。よって、脱走は当てはまらないと。そしてこの空間が、自分で選んだ空間であることが間違いない以上、脱走という言葉はよりいっそう当てはまらなくなってくる。

では、なぜ落ちるといえるんだと。それは、落合、隅田、堀田の三人が言ったとおり、まず第一には今のステージをキープできなくなると。そして落ちると。しかしそれだけではない。落ちた人たちは、二度と高い世界へ昇ることができなくなると。そして、三つの悪趣、地獄・餓鬼・動物に生まれ変わることは間違いないと。では、なぜ地獄・餓鬼・動物に生まれ変わることが間違いないんだと。いいか、なぜ地獄・餓鬼・動物に生まれ変わることが間違いないんだと。この世を構成しているもの、この現世を構成しているものを君たちはどう考えるか。暴力、どうだ。あるいは小さい生き物に対する嫌悪、殺生、どうだこれは。これは、わたしたちを地獄の世界へと導く。これは認めるか。

では第二にだ、貪り、テレビ・雑誌・いろんなもので、近ごろはマンガにまで食べ物が出てくる。おいしい食べ物、何とかは、かんとかはと。そして例えば、食べ物の中で刺し身などは殺生プラス餓鬼であると。どうだこれは。認めるか。

次は無智だ。真理に対する教えのデータをどんどん入れていくんではなくて、そして、その場その場の楽しみ、快楽、これはセックスも含めたね、快楽、ま、セックスは人間本来持つるものだから、罪の中ではそんなに重たいものではないけど、より外側に向かう快楽、スポーツ、レジャー、こういうものがこの世の中を構成している。どうだこれは。

そして現世に対して執着し、現世に対して帰っていきたいと考える人は、この三つの要素が強い人であると。どうだ。せいぜいが情であると。情というのは、人間本来が持つてる、その三つよりもレベルの高い、しかしわたしたちを人間界に固定させてしまう、偏った個に対する執着。これが情であると。どうだ。

そしてこの三つ、そして四つ目の情、これを比較するならば、当然、初めに挙げた三つ目の方が強いと。どうだこれは。情の話が今のちまたの中であるかといったら、あまりないよね。今は、地獄・餓鬼・動物のデータが大量にあるわけだ。そして、この世界へ彼らは帰っていき、何を考えるのかと、何を話すのかと、そして何をなすのかと考えたら、この三つの煩惱を満足させる生き方をなすわけだ。どうだそれは。ということは、彼らは三つの悪趣に生まれ変わるわけだ。これは君たち、脱走だといえるか、それとも落ちるといえるか。

そして、わたしは彼らに対して大変な悲しみを感じる。本当に、ねえ、君たちがいなかったら、多くの涙を流すだろう。なぜなら、もう彼らは済度されないんだと。そして彼らは、今から地獄・餓鬼・動物の三つの苦しみを受けるんだと。そしてこれが、菩薩の悲である。

わたしが政治に立とうとしたのも、宗教だけでは済度するスピードが遅いと。だから政治的な力を使って、何とか早くシャンバラ化計画を進めたいと。もちろん、わたしの生きてるうちにすべてが完成するとは思っていない。しかし、できるだけのことばやらなければならないと。

そしてわたしは、今落ちていった人たち、こういう人たちがあつた程度出るとは覚悟していた。しかし、そろそろ食い止めなければならぬと考えている。では、どのようにしたら食い止められるのかと。それは君たちが、今日の説法を何度も何度も聴き、これから話すことも含めてね、そして自分の心のあり方、言葉、そして行為というものを再チェックしない限り、オウムは崩壊に向かうだろうと。一人一人が、菩薩の本当の愛、そして哀れみの修行をしない限り、崩壊に向かうだろうということだ。特に、ステージの高い者たちが心を乱しては、いかんともし難いと。

何ゆえに菩薩なのかと、何ゆえに修行者なのかと、何ゆえに凡夫なのかといったらね、ここで三つの言葉をわたしが使い分けてる背景には、菩薩はある段階までの修行が終わり、そして心の成熟の修行に入っていると。その修行というものは、平等心・愛・哀れみであると。そして、ここで止めてしまうと、編集がまた誉め称えることを抜かしたじゃないかというからつけ加えるけども、平等心・愛・哀れみであると。今日の話はこの愛・哀れみについて話したいと考えているから、平等心を抜かして愛・哀れみといってもいいだろう。

そして菩薩の悲しみというのは、菩薩の悲というのは何かといたら、そういう落ちていく魂に対する哀れみである。仏教が本当に廃れた背景には何があるのかと。それはこの哀れみ、あるいは愛の心が消滅したからであると。つまり、仏教徒が修行者になってしまったからであると。

では、修行者と菩薩の違いは何だと。修行者とは、自己の苦悩を滅却するための修行をしている人と。菩薩というのは、自己の修行もそうだけでも、ある段階に行き、心を成熟させるための愛・哀れみの実践をしている人ということができるよう。何度も同じことを言うけど、そしてその中の哀れみというのは、すべての魂が苦しみから本当に解放される、落ちていくことから本当に逃れると。

三悪趣の世界の喜びというのは、覚醒剤と同じである。瞬間瞬間を楽しませてくれる。しかし、それはあくまでも瞬間瞬間であって、わたしたちを確実に三つの悪趣に生まれ変わらせてくれるんだと。それを知っている菩薩が、なぜすべての魂が三悪趣の道を選ぶんだと。なぜ、すべての魂は真理に気づかないんだと。そしてこの心の働きこそ、心の本当の功德である。

もしわたしの弟子たちが悲、悲しみ、大悲、大きな悲しみについて考え、それを実践するならば、落ちる人はいなくなるだろう。ところが、今の大師も含めて、シッシャの心は外側に向かっている。

神通の中の最後の神通、漏尽通というものがある。これは、他の煩惱状態を見るだけではなく、自己の煩惱を完全に滅却した状態である。そして、この現世にいて現証すると。現世にいて現証するとは何だと。これは、この現世にいて、いいですか、煩惱の生じない状態と。現世にいて、仏陀の状態をキープできる状態と。これが漏尽である。そしてそれは、心の働きを完全に知り尽くしたとき起きる。そしてその漏尽を持つてゐる者は、現世にまみれても全く煩惱を受けないと。

ところが、大師の修行の甘さ、これが原因して、すぐグルがいろいろこういうふうな講話をなさないと、心が乱れてしまう。そして自分の感情に支配されてしまう。ところがだ、大師はエネルギーも強い、心の働きも強いから、その影響を受けると、シッシャは。

そして、スッカー、お前に質問しよう。心のなす業と身のなす業とではどちらが重たいか。どうだ。

(スッカー) 身のなす業が重たいと思います。

(尊師) 身のなす業が重たいか。

(スッカー) はい。

(尊師) ではカンカー・レーヴァタ、心のなす業と身のなす業はどちらが重たいか。

(カンカー・レーヴァタ) 心のなす業の方が重たいと思います。

(尊師) ではヴァンギーサ、身のなす業と心のなす業はどちらが重たいか。

(ヴァンギーサ) 心のなす業の方が重たいと思います。

(尊師) ではマハー・マヤー、身のなす業と心のなす業はどちらが重たいか。

(マハー・マヤー) 心のなす業の方が重たいと思います。

(スッカー) すいません。言葉が足りませんでした。一般凡夫の場合は、身のなす業の方が重たいと思います。

(尊師) そして、心のなす業の中で排他的な心、これは地獄へ通じる。破壊的な心、これは地獄へ通じる。あるいは貪る心、これは餓鬼へ通じる。あるいは無智を喜ぶ心、これは動物へ通じる。あるいは偏った見方によって執着する心、これは人間へ通じる。あるいは闘争に明け暮れる心、上を蹴落としてやろうとする心、これは阿修羅に通じる。そして自己のカルマに満足している心、これはデーヴァ、天界へ通じる。そして菩薩の心は、そこから離れてるんだ。

わたしは近ごろ、よく夜摩天と会話をする。例えば、わたしはヴァジラヤーナのイニシエーションを行なうと。これはどうだと。これは身における悪業をなしてるわけだと。例えば、頭からエネルギーを抜くために、叩くわけだからね。当然、この行為は地獄へ通じるだろうと。どうだと。そのとおりだと。お前は悪業をなしてる。そうかと。では、お前は菩薩の心というものが理解できるかと。その背景にある愛、あるいは哀れみについて理解できるかと。それに対して答えてみると。お前はわたしの身の行ないについて、裁くことはできるだろうと。しかし、お前は、わたしの心の働きを理解できないと。だとするならば、夜摩天であるお前が菩薩を裁くことは、悪業になるか善業になるか考えなさいと。わたしはこのような話を、近ごろよくするんだ。

そして君たちが、いいかな、本当に慈悲を持つ。日々、慈悲を意識する。わたしは菩薩の心を今日は保持できているだろうか。そしてこの心の働きを、心に明を保持するという。心に光を保持すると。これは瞑想としては、光の瞑想と同じだ。光を自分の心の中に入れていく瞑想と同じだ。最高の光、それは慈悲だからである。

そして、古いシッシャが、新しいシッシャが来たとき喜ぶと。一人の、これで三つの悪趣から解放される魂がやってきたと、これはシヴァ神と仏陀の意になつていると、素晴らしいことだと、わたしたちに法友が一人できたと、心から喜んであげる心を持つ。一日前に来た人は、もうそれだけ先輩だから、心から喜んであげると。良かったなあと。また一人、真理に目覚め、出家した人がいると。このように皆が考えたならば、本当にこの大乘の輪というものは正しく発展するだろう。

しかしそうではなくて、わたしも苦しいのに、わたしも現世へ帰りたいのに、また一人入ってきたと。この人も苦しいだろうなと考える。そうすると、苦しみの波動がどんどん強まる。

例えば、ここに一匹のライオンがいたとしよう。このライオンが心に発願し、わたしは殺生をしないで生きようと、わたしは今ライオンであると、わたしは殺生をしないで生きようと、そう考えた。そして目の前に鹿が通りかかったと。そのときそのライオンはおなかのすぐ空いてたと。しかし、その鹿に襲いかからなかったと。それを遠くで見ていたライオンの群れがあったと。あのライオンはなんて馬鹿なんだと。目の前にあれだけおいしいえさが通りかかったのに、なんて馬鹿なんだと。そしてその鹿を、その大群は追っかけて、すべて食べてしまったと。殺してね。

どうだ、君たちは。だれが悪業をなさず、だれが悪業をなしたと思うか。だれがいい世界へ行き、だれが落ちると思うか。空腹に耐え、鹿に襲いかからなかったライオンこそが、地獄のカルマを破り、高い世界へ行く。そして、鹿に襲いかかったライオンの群れこそが、殺生のカルマによって落ちていく。どうだこれは。

これと同じように、人間の意識レベルも全く同じである。人間の見ているものは、人間のカルマによって見ている。よって、それは真理ではない。修行の途上にある、阿修羅のカルマを持つてゐる者が、人間界までは脱

却したと。しかし阿修羅であると。その者がその目で見たとして、それは阿修羅のカルマによって見てるわけであつて、それも絶対的な真理ではない。人間界の真理に比べれば、それは大いなる真理といえよう。そして、デーヴァがデーヴァの目で見ると。それは阿修羅に比べれば、真理に近い。しかし真理ではない。

では、何をもって真理といえるんだと。それは、すべてを知っている者。欲界・色界・無色界の構成を知っている者。世界の創造・維持・破壊を知っている者。そして、すべてのものに執着せず、離貪してる者。なぜならば、もし君たちが修行者として、真理を学んだ者としてライオンの動きを見るならば、襲いかかったライオンに対して哀れみを覚えるだろう。なんて彼らは馬鹿なんだと。彼らはこれによって、三悪趣へ生まれ変わる一つの因を作ったと。そしてその条件は空腹であると。

では次に、この条件、縁というものを君たちは貴重なものだと考えるか。どうだ。どうしてこの縁を貴重なものだと考える？ わたしはそう考えない。この縁を滅してこそ、つまり空腹という感覚がなければ、彼らは殺生する必要なかった。だからこの条件を滅してこそ、本当の真理に到達できるんだと。だから、遠離・離貪の修行が必要なんだということだ。

君たちは麻原彰晃の弟子である。君たちは類いまれな功德を持って、今オウム真理教のシッシャとなつてゐる。君たちは、功德によつて解脱のチャンスを得ている。君たちは、心を成熟させる機会に恵まれている。

では君たちはだ、これらのもつと加えればね、たくさんあるだろうこれらの条件を考えて、シッシャをやめる、これを脱走するという言葉を使うか。それとも、落ちるという言葉が適当だと思ふか。どうだ。そして、この「落ちる」という言葉、この言葉は、相手に対して輕蔑を込める言葉であらうか、それとも本当に悲しみ、哀れみを込める言葉であらうか。どうだ。そしてその点に立つならば、君たちは今の自分たちがいかに幸せな魂であるかが理解できるだろう。君たちはまだ落ちていない。どころか、君たちは修行を続けることによって、必ずや上がっていくだろう。どうだ。

今日この瞬間を境に、小乗であらうと大乘であらうと、少なくとも哀れみ、少なくとも愛の感情を持つよう

では、愛とは何だと。もうわかるね、哀れみの反対の意味だ。愛というのは、皆が三悪趣から脱却し、そして高い世界へ上がっていかうとするとき、「うれしい」と、「本当によかった」と、そう考える心の働きだ。

そして君たちが、愛・哀れみの実践をするならば、新しいシッシャが来ても、その人は本当に素晴らしい——神聖という言葉ではないぞ。神聖というのは神の聖と書く。神を超えた者、仏聖、仏陀の聖だ——仏聖のヴァイブレーションにまみえ、必ずや今生において、あるいは今生駄目でも、未来際において菩薩となり、仏陀となり、すべての魂のために、あるいは、まず自分自身の苦悩を完全に滅却しようと、そしてすべての魂のために修行しようと誓うんじゃないだろうか。

そして、そう思わせるような神聖な言葉、あるいは心のヴァイブレーション、これを発することが大師の役割であるということを、あるいは古いシッシャの、一日でも早く入ってきたシッシャの役割であるということとを理解して、今日の話を終わりたいと思います。

第十話（一九八九年九月二十四日 世田谷道場）

それでは始めましょう。ええ、今日はね、皆さんがこの暑い中大変な格好をしてね、真理を学び、実践したいと考えてらっしゃるから、特別に瞑想についてね、それから戒・定・慧の定と慧について、少し専門的な話になるかもしれないけども話したいと。

で、もちろんその戒の基本的な部分というのは何かといったら、わたしたちを幸福にしてくれる、現世的にも心を安らがせるという意味においても幸福にしてくれる方法、これが戒であると。そしてその安定を背景として、五蓋ね、——皆さん、五蓋というのは知ってますか。瞑想するときの五つの邪魔物、五蓋。どうかな。

まず、第一は眠気。これはオウムの場合、瞑想していて虚空三昧だといって、ある段階まではそれを肯定しているけども、実際には虚空三昧というのは暗性の状態であって、これはね、ちょうど囚人が牢獄に放り込まれている状態であるといわれています。だからこの、まず眠気、あるいは眠りというものを追放しなければならぬと。

そして次に掉挙ね。これ何かというと、興奮状態と。つまり、明日あれをしたいな、これをしたいなと、子供がちょうど遠足に行くときに、明日のことを考え興奮している状態。この状態というのはわたしたちの心を高ぶらせてくれると、だからそれを消滅しなければならぬと。

そして、疑心。この疑心というのはいったい何かといったら、ちょうど修行に入った者が疑いを持って、「本当にこの修行法でいいんだろうか」と、「この修行でわたしは幸福になれるんだろうか」と、あるいは「この修行でわたしは解脱できるんだろうか」というような疑いを持って修行している状態と。

そして、懈怠と。懈怠というのは、「ああ、今日も修行したくないなあ」と、これ、あなたの方の手を胸に当ててみたらね、お気づきになるかもしれないけども、「ああ今日はいいや」と、「明日に回そう」と、あるいは「あさってへ回そう」というような心の怠惰さ、これがわたしたちの修行の障礙であると、障害であると。

そしてもう一つは、悪心ね。悪心とは何かといったら、要するに、他の言葉を使うなら嫌悪と。憎しみの情

と。こういう心の働きがあると、心が憎しみの方向に向かっていて集中に欠けると。

で、いったいわたしたちは基本的な修行のために何をなせばいいのかと、あるいは実践的な修行のときは何をなせばいいのかと、あるいは実践的な修行の結果として何が得られるのかと。これが戒であり、これが定であり、これが慧であるということができますと。

ではいったい、戒にはどういう意味合いがあるんだと。例えば生き物を殺さず慈しみを持ちなさいと。これは先程言ったわたしたちのね、先程言った悪心、嫌悪というものを消滅するための修行法であると。「ああ、なるほどなあ」と、「だとするならば、瞑想修行を完成するためには当然、殺生を離れ、そしてすべての生き物を利する心が必要なんだ」と。

では次は、心の愚鈍さは何から出てくるんだと。これは貪りから出てくると。「あ、そうか」と、「そこで出てくるのが貪ることを離れ、盗むことを離れ、そして人に施す」と。「そういう心の豊かさが、わたしたちの瞑想の修行を進めてくれるんだな」と。

では、邪淫をしないというのは、これいったい何だと。もちろん、邪淫によって無智に覆われると。これは、この中でも性エネルギーを漏らしたりしたときの後の状態、ものが考えられないと、思考力が鈍ると、そして眠りが多くなると。この無智に陥った状態。これから離れるために不邪淫の戒があるんだと。

そして、不妄語の実践をすることによって、嘘をつかないことの実践することによって、もちろんアストラル世界を浄化すると。それだけではなくて、言葉の力というものを持たせるようになると。すると何が起きるかという、例えば怠惰さがなくなると。例えば興奮がなくなると。今なさなければならぬこと、それがはっきりとわかり、そしてその実践をすることによって、その結果が現れてくると。

四つの殺生、偷盗、邪淫、妄語という蓋を離れるだけで、それをなさないだけで、瞑想の準備というもの一つできるんだと。これはね、詳しくはマハーヤーナのおそらく次の号か次の号に、また、あの巻頭の特集でね、戒・定・慧についての話が解説付きで載ります。これは仏陀釈迦牟尼の経典の中のものとも必要、もっとも重要な経典だとわたしは考えている。そしてそれについて解説も詳しくなされていますから、よく、

それをお読みになって検討なさったらよろしいと。そして今日はね、経典に表われてこないことについて少し話しましょうと。

実はね、今わたしの弟子に、出家した医者の中に中川君というのがいます。そして、まだ出家なさってらっしゃらないけども、やはり癌の治療を一生懸命やってる、お医者さんの堀口さんというのがいますと。で、これとマハー・ケイマ、あるいはわたしの体験を交えながら、あなた方に少しね、アドバイスをしたいことがあると。

それは何かというと、わたしたちの修行の目的というのは阿修羅の世界、あるいは天界、あるいはブラフマン、あるいは光音天といった世界をぶち抜いて、マハー・ニルヴァーナに入ることが修行の目的であると。そして、そのためには何が必要かというと、心の浄化、そして功德、そして瞑想修行が必要である。いいですか、で、こういう人が中にいると。これはよくね、仙道の修行やってる人が、このパターンに陥りやすいんだけど、瞑想修行、特に小周天、あるいは大周天といったようなツァンダリーに似た行法をやりますと、体の調子がおかしくなってしまうと。でもなぜ、おかしくなるかわからないと。というのは経典には、体が強くなるはずだと書かれていると。しかし、実際におかしくなってしまうと。なぜだと。

小周天のもともとのねらいは何かというと、薬、つまり、エネルギー、純粋なエネルギーを体に回すと、つまり浸透させることにありますと。そして、その浸透させたことによって、いっそうエネルギーを強め、それをまた浸透させると、それを繰り返すと。そして、本当にエネルギーがシッな、心身がね、地・水・火・風という三つの元素を超えた、強い清らかなエネルギーに満ち溢れた状態。これを指しますと。そして、その状態がデヴァの状態であるともいわれていますと。まず、ここまでいいかな。すると、そのために必要なものはいったい何だといったら、まずエネルギーを強めることであると。そして仙道の修行ではエネルギーを強め回しますと。しかしだよ、このエネルギーの源は何かといったら、心の働き、あるいは他との交渉によって生じた、まだ現代の科学では検出されていないけども、確実にあるエネルギーであると。それはなぜかというと、実際に検証すると、予想された結果が出てくると。

ということかと。例えば一生懸命エネルギーを回すと。そして、そのエネルギーが昇華されて、つまり浄化、清らかでない状態のエネルギーを体に回すということはどうか、君たち。毒をわたしたちの体に回すことになると思わないか。どうですか。そして、そのエネルギー強ければ強いほど毒はわたしたちの体に浸透しませんか。わかりますか。これが小周天、大周天から起きてくる欠点なんです。

つまり、何かというと、小周天というのは、体の周りをエネルギーをこう回すわけだけども、大周天もそうだけでもね——回すわけだけでも、それらの修行法というのはエネルギーを浄化するプロセスがないと。そして、単にエネルギーを回すだけであると。すると、そのエネルギーには毒が含まれているから、当然わたしたちの体を害するんだと。

じゃ、例えば、オウムの信徒で功德を積んでいるのによ、エネルギーを回して病気になるのはおかしいじゃないかと考えると。そりゃちょっと待ってくれよと。だからわたしは先程ドクターの中川君、あるいは堀口さんの例を挙げたんだよって。

つまり、どういうことかという、例えば癌の末期症状に至る人のカルマというのは、いいカルマだと思いますか。悪いカルマだと思いますか。しかし、その人を救済するためにエネルギーの交換を行なうとしたら、自己の持っている風は、つまりエネルギーは濁りますか、濁りませんか。そして、その濁ったエネルギーを回すわけだね、どうなる。当然、体は病んでくるよね。

もちろん、強烈な瞑想をね、例えば八時間ワークして、八時間修行するとか、あるいは五時間修行するとか、あるいは、もう病院の仕事以外は、いつも功德のことを考えてるというような状態だったならば、それも可能かもしれない。つまり、相手からエネルギーを吸収して、それを、つまり邪気を生氣に変えて回すと。これは最高だろうと。しかし現代生活っていうのはなかなか時間を与えてくれないよね。どうかな、それは。そこで病が起きてくるんだと。

よって、釈迦牟尼が何をおっしゃったかという、まず戒、まず戒の前に三つの布施、そして戒の後に定と。定というのは何かというと、心を静め浄化していく瞑想だね、要するに。そしてその瞑想の延長上に智慧があ

るんだと。で、この智慧というのは何かと思ったら、神通力のことですよ。そして最後に、この世にいながらにして涅槃を体現できる漏尽という神通力をつけて、それで終わりなんですよ、小乗の修行はと。

ということは、わたしたちが本当の瞑想をやるためには何が必要だと。まずベースに布施、そして持戒、そして瞑想、そして智慧の修行ということになるわけだね。

では、それをオウムではいったいどのような方法で考えてるんだと。これは君たちも知っているとおり、布施に当たるもの、何かといったら、もちろん法施・安心施・財施、あとバクティといわれている奉仕活動と、これによって心の浄化をしましょうよと、そして功德を積みましょうよと、そして在家における五戒、殺生するなと、偷盗するなと、邪淫をするなと、妄語を話すなと、そして酒を飲むなと。これらをすべて、わたしたちが瞑想修行に入ったときの風ね、ウインド、エネルギーをけがすんですよ。そして、強い意志の強化をし、それから修行に没頭し、そして瞑想に入り成就しましょうよと。

ところが今、君たちが望んでるものは、もっともっと速いペースで与えられるものであるとわたしは考えます。「いやそんなこと言たって麻原」と、「昔は人力で歩いた」と、「それが馬を使うようになり、そして馬車を使うようになり、そして自転車、あるいは自動車と、そして今は飛行機からジェット機となってるんだよ」と。「お前の言ってることは遅いよ」と。確かにそうかもしれない、もちろんそれについてはいろいろ検討しなきゃならないと。

速く歩き過ぎている、生きることについて早く結果を求めている現代の日本人に対して、いったい何を与えたいんだと、どうしたらいいんだと考えた場合、当然そこではヴァジラヤーナの考え方、あるいはタントラヤーナの考え方が出てきよと。しかし、このヴァジラヤーナの考え方、タントラヤーナの考え方はもともとと先程言った布施、持戒、そして瞑想、そして成就といったプロセス、この、ある程度の基礎的なトレーニングのできた人にしか与えることはできないんだよと。

それはちょうどね、このようなものであると。ここにヘロインがあると。ヘロインって知ってるよね、みんなはね。ヘロインを打つと一時的に神秘的な体験をします。しかしそれはわたしたちの意志の力を弱らせ、最

終的には廃人にするという薬物です。しかし、この使い方には二通りあると。一つは先程言ったとおり、その不思議な体験をするために使い、廃人になっていく人もいます。しかし、ものすごい激痛に苦しんでいる人に対して使い、その激痛を和らげる効果もあると。このヘロインの善なる使い方をするのか、あるいは悪なる使い方をするのかというのは、そのヘロインを手にした人の選択によって決まると。

修行も同じであると。善なる、例えばここに道具があったとしても、それを悪用することもできないことはない。例えば超能力を軍事に使用したいと考え、研究している国もあると。しかし本来、神通力、超能力というものは、わたしたちを本当に幸福にするために使われるものであって、戦いのために使われるものではないと。それと同じように、まだわたしは明かしてないけども、ヴァジラヤーナの考え方、あるいはタントラヤーナの秘密の瞑想の中には、わたしたちをね、速やかにいろんな力を付けてくれるものがあると。しかし、それをもし提供するとするならば、まだ心の成熟していないあなた方に原爆を持たせるようなものであると。あなた方を破壊に至らせるようなものであると。よって、出家した弟子の中のごく少数の者に、少しづつ少しずつヴァジラヤーナの話を説いていると、あるいはタントラヤーナの瞑想法を説いていると。

じゃあ麻原と、いったいヴァジラヤーナとそれからマハーヤーナ、大乘、あるいはヒナヤーナ、小乗とはどのように違うんだと。それについて少しだけね、ここで考え方の背景にあるものの違いをお話ししましょうと。いいですか。

ちよつと速いよね。今日は五、六、七、八と九月、五カ月ぶりの説法だから五カ月分を一気に終わらしてしまいたいと思ってるからね。だから猛スピードで話しています。もちろん、今までわたしを信じてコツコツと修行し、あるいは教學してる人は、これぐらいのスピードでも、もう麻原は何言ってるかわかったということになるだろうと。しかし、「ああ、麻原もいないし、現世を楽しもうか」といって、ゆつたりと修行してた人は、なかなかついてこれないかもしれない。

わたしは病んでるときも、あるいは元気なときも、眠ってるときも、起きてるときも、絶えず修行のこと、瞑想のこと、それから人類はどのようにしたら済度されるだろうかということを考えています。ですから、た

とえわたしが死にかかっているようが、わたしの心というものは、あなた方に次はどのような法を説き、喜んでもらおうかなと、そして高い世界へ入っていただくように、どのように話そうかなということを絶えず思索しています。そして、これから話す内容がその中の一つであると。これはヴァジラヤーナの考え方ですから、あなた方の中には納得できないものもあるかもしれないけど、それについてはその前のヒナヤーナ、マハーヤーナの教學をよく行なって理解するようにしてください。

例えばここにだよ、Aさんという人がいたと。いいですか。このAさんは生まれて今まで功德を積んでいたと、このままだと天界へ生まれ変わりますと。いいですか、ここまでは。じゃあ次の条件ね。ところが、このAさんには慢が生じてきて、この後、悪業を積み、そして寿命尽きるころには、地獄に落ちるほどの悪業を積んで死んでしまうだろうと。いいですか。こういう条件があったとしましょうと。

つまり、ここで出てくるのは天眼、来世を見つめる力、あるいは宿命、前生の力、あるいは漏尽、相手のカルマを完全に見つめる力といったような、いろんな神通力の要素がありますよと。いいですか。

じゃ次にだ。このAさんを、ここに成就者がいたとして、殺したと。この人はどこへ生まれ変わりますか。天界へ生まれ変わる、そのとおりだね。しかし、このAさんを殺したという事実をだよ、他の人たちが見たならば、人間界の人たちが見たならばね、これは単なる殺人と。いいかな。そして、もしだよ、このときにAさんは死に、そして天界へ行き、そのときに偉大なる救世主が天界にいたと。そして、その天界にいた救世主が、その人に真理を説き明かし、永遠の不死の生命を得ることができたとしましょう、Aさんが。いいですか。このときに殺した成就者は何のカルマを積んだことになりましたか。

すべてを知っていて、生かしておくと思業を積み、地獄へ落ちてしまうと。ここで例えば、生命を絶たせた方がいいんだと考え、ポワさせた。この人はいったい何のカルマを積んだことになりましたか。殺生ですかと、それとも高い世界へ生まれ変わらせるための善行を積んだことになりましたか。ということになるわけだね。でもだよ、客観的に見るならば、これは殺生です。客観的というのは人間的な客観的な見方をするならば。

しかし、ヴァジラヤーナの考え方が背景にあるならば、これは立派なポワです。そして、智慧ある人は――

ここで大切なのは智慧なんだよ。智慧というのは——わたし先程何て言った？——神通力と言ったよね。智慧ある人がこの現象を見るならば、この殺された人、殺した人、共に利益を得たと見ます。OKかな、これは。ところが智慧のない人、凡夫の状態でこれを見たならば、「あの人は殺人者」と見ます。どうかな、これは。

じゃあだよ、ヒナヤーナ、小乗の修行をしてる人が、殺すなかれの修行をしてる人がだよ、例えばここにヴァジラヤーナのグルがいて、殺したとしましょうと。これはどうですか。この人は殺人を起したというふうに見えますか。この人は大罪を起したというふうに見えますか。それとも功德を積んだというふうに見えますか。そう、大罪を起したと見るよね。というのは、まだヒナヤーナではその教えがないから。つまり、現象に対して、何が功德になり、何が悪業になるかというのと、それは心の働き、それだけではなくて、正しくものを見つめる力なんですと、智慧なんですと、神通力なんですとということなんだよ。

じゃ、はい、もう一つ例を挙げよう。ここにAさんがいたと。いいですか、この人は、今は、今死ぬならば地獄へ落ちるかもしれない。いいかな。しかし、この人はこれから先、功德を積んで、最終的には天界へ生まれ変わるカルマがあったんだとしましょうと。ここでまだ完成をしていない修行者がいたと。で、相手の人生を見誤ったと、今、ここで殺せばこの人は天界へ生まれ変わると。いいですか。そして殺したとしましょう。で、そのときの、その修行者の心は、この人はこれで天界へ生まれ変わるんだと思って殺したと。しかし、この人はどこへ行きますか？——だとするならば、この殺した修行者は功德を積んだことになりま

すか。悪業を積んだことになりませんか。しかし、心の働きは相手を殺そうと思って殺していますか。殺そうと思っていないで殺していますか。思っていないで殺してるよね。さあ、ということは何かというと、単に心の働きだけで功德になるものでもない。

どうやら本当の功德になるということは、ものを正しく見つめる力、その正しさというのは三世を見つめる力を背景として、正しく見つめる力プラス心の働きなんだと。そして、心というものを背景に修行を進めていくのがタントラヤーナ、あるいはヴァジラヤーナの教えなんです。

でもだよ。聞いて何となく納得できるだろうけど、君たちにおいてね、その理解できない部分が出てくるよ

ね。それはなぜかという。今、この人を殺したら、どの世界へ生まれ変わるんだと。そしてその世界にはだれが住んでるんだと。これが理解できてなければ、このヴァジラヤーナの実践はできますか、できませんか。ということなんだよ。だから、これは大変に速い功德の積み方である、でしょ。

というのは、ここにいる人を、今、人間界の低次元から天界へ上げると。しかも、そこには偉大な救世主がいて、その人と縁があつて、その天界へ行った人は永遠不死、マハー・ニルヴァーナに入ることができる。としましょうと、そこに一人送り込んだわけだから、大変な功德を積んだことにならないですか。どうですか。

だから、そういう偉大な功德の積み方、これができるのがヴァジラヤーナであると、あるいはタントラヤーナであると考えてください。しかしだよ、それは最後にあなた方がなす修行であると、今は何をなさなきゃならないかな。修行としては。まず、布施、そして持戒、そうだね、そして瞑想、そうだね。こういう布施、持戒、瞑想をなして初めて、次のステージの大乗の意味合いがわかるようになってきます。つまり大乗の真の意味合いというのは実践、小乗の実践をなして初めてわかるんだということを理解しなければならぬ。

では、いったい布施には何がありますかと。何がありますか。じゃあ、財施にはどういう財施がありますか。真理に対する財施と、貧しい人に対する財施と、公共のものに対する財施があると。そうですね。よく教学してます。じゃあ次は、その財施の真の意味合いは何ですかと。わたしたちをどの世界へ導いてくれるんですかと。貪りが当然、消えるから、餓鬼の世界を消滅すると。あるいは真理のために得たものを利用するから、無智のカルマが消滅すると。そして天界へ生まれ変わると。財施、それから法施、安心施の実践によって、天界へ生まれ変わると。もちろん持戒の実践も必要ですよ。

じゃあ麻原と、なぜお前はそういう真理を体現してるかと言いな——さあいいよ本題です——政治に出てくるんだと。なぜお前は法によって救済をしないんだと。これにはいろいろと意味があると。しかし、もっともあなた方にわかりやすい——これは次の次の号の『マハーヤーナ』のインタビューで出てくると思うけども——話をしなければならぬ。

それは、わたしはあなた方と約束してるよね。何かというと、この日本を、そして世界を、生きてる限り

シャンバラ化しようじゃないかと。どうですか、これは。そして、シャンバラ化というのは本当の意味での福祉の充実した世界と、そうじゃないかな。本当の意味での教育の充実した世界、そうじゃないかな。本当の意味での豊かな生活、つまりわたしたちが日々生きていて、例えば病気になる時は、その病気からね、カルマの法則を学び、脱却できると。例えば経済的に困ることもない。そういう社会じゃないかな、どうかな。そして真理を実践していても、堂々と真理が実践できると。そういう社会じゃないですか。どうですか。

で、もしだよ、その社会をつくらうとしたならば、今の、要するにロッキード事件、あるいは、リクルート事件、そうだね。このような要するに餓鬼のカルマを持った政治家たちにとって、わたしたちが今からなしているかと思っていることが受け入れられるだろうか。どうですか？

例えばね、真理学園一つつくるにも、こういう言い方をしています。これは静岡県の話です。「学校はね、人口がどんどん減っていつてから経済困難なんですよ」と、「それを考えてくださいよ」と。どうかな、みんな。経済困難だったならば正しい教え、これを背景とした学園がつくることのできないのかな。どうですか。それはぶち破るしかないでしょう、どうですか？

例えばね、これは報告でもあるけども、八月の二十九日に宗教法人の認証が下りました。ですから今、オウム真理教は宗教法人オウム真理教です。でね、それに対して都庁が言ったことは、何と言ったかと。「都庁もなかなか頑張るでしょう」と。「都庁もなかなか頑張るでしょう」とは、どういう意味かわかりますか。あなた方は。認証しない方向では「なかなか頑張るでしょう」と言ったわけですよ。

このような問題はだよ、例えば瞑想してるだけで解決できるかな、どうですか。石ころを拾うためには手が必要なんです。ご飯を食べるためには、同じように手が必要なんです。歩くためには足が必要なんです。物を見るためには目が必要なんです。それと同じように救済にはいろんなかたちがあります。そして心をわたしたちが浄化し、高い世界へ生まれ変わるためには、もちろん瞑想修行が必要です。功徳を積むことが必要です。しかし、外側を固めるためには、例えば経済が必要なんだと、例えば政治が必要なんだと、これがわたしの考え方です。

第十一話 (一九八九年十一月四日 富士山総本部)

今日は四時ちょっと前ぐらいから、君たちがふだん受けているアーモンドの修法を、今までね、まあ途中で小さな用事がいくつかあったけども、行なったわけけども、まあ雑念が今日は五回ぐらい出てきたね、その中で、で、今日は何の話をしたかという、欲について話したいと思います。

君たちは欲を肯定する立場にあるか、あるいは否定する立場にあるかと聞いた場合、どう答えますか。おそらく、教学を全くしていない人はわからない。教学を少ししている人は、いや、それは欲は否定すべきであると。教学をよく行っている者は、いや、それは条件によって、欲を肯定し、条件によって欲を否定すべきであるというふうに考えるだろう。つまり、欲求の方向性が大切なんであって、欲求そのものは意味がないんだということだね。

じゃあ、欲求の方向性が大切とは、いったい何だろうか。ここに空腹な者がいたとしよう。そして、「ラーメンが食べたい、ラーメンが食べたい、ラーメンが食べたい」と念じた。そして、その欲求はあるけども、ラーメンが食べられなかった。他に食べる物もなかった。そして、一日が過ぎ、二日目、目の前にラーメンが出された。そして、それをすすって食べた。どうだ、君たちは。このときにこの空腹を感じていた人は歓喜すると思うか、しないと思うか。そうだ、そのとおり歓喜するよ。「わたしは食べた」と、「ラーメンを食べた」と。おいしいと思う。

ところがもし、ここに空腹な人がいたとして、その人は空腹について、何の心の働きも生じなかったとしよう。そして、一日が過ぎ、二日目にラーメンが出されてラーメンを食べた。これはどうだ。「あ、わたしはラーメンを食べた」と。そこに歓喜は生じるか生じないか。つまり、欲求というものは、その行為に至るとき心の状態をもうすでに表現していることができる。

では、ここに修行者がいて、「自分は修行したいんだ、修行したいんだ、修行したいんだ」と考えてると。あるいは、「ワークをしたいんだ、ワークをしたいんだ、ワークをしたいんだ」と考えてると。そして、「功徳

を積むぞ、功德を積むぞ」とふだんから考えてると。そういう人がいたとしよう。そして、初めのうちは三時間、四時間しかワークをさしてももらえなかったと。あるいは功德を積む時間がなかったと。あるいは瞑想する、修行をする時間がなかったと。ところが、例えばその人が欲求していて、一日中瞑想できるようになったと。このとき、この人は喜ぶと思うか喜ばないと思うか、どうだ。

ところが、ここに修行者がいて、これは修行者というのは名ばかりで、ただ淡々と生きてると。何の欲求も持っていないと。そして、日々の生活に追われ、何となく一日が過ぎると。今日も一日ワークが終わったと、明日も一日ワークが終わったと。この状態で、「はい、あなたは瞑想修行に入りなさい」と言ったとき、その人は瞑想修行において「うれしい、わたしは瞑想修行ができるんだ」という欲求、あるいは喜びが出ると思うか。

君たちに質問をしたい。もし、この人間の世界に川の流れる世界は上流と下流があるとしようじゃないか。つまり、上流と下流というのは何を表わしているかというと、要するに川の方向性を表わしていると。川の流れる方向性を表わしていると。いいかな。そして、この川の流れる方向性がだ、地獄に向かって流れていると思うか、それとも天界へ向かって流れていると思うか、どうだ。

よし、ではもう一つ質問しよう。この地獄に向かって流れている川の流れる、上流に泳ごうとした者がいたとしようじゃないか。もし、その人が全力で上流に向かって泳いだとしたら、どこへ行き着くと思うか、どうだ。当然、天界を超え、マハー・ニルヴァーナに行き着くわけだね。

ということとは、川の流れるは下流に向かっていると。その下流に向かっている川の流れるに対して、上流に向かって全力で泳ぐとした場合、どうだ、君たちは、大変だと思うか、大変じゃないと思うか。そして、放つとけば下に流されるか、それとも上へ流されるか。

そして、じゃあ、川の流れと同じぐらいのスピードで上流に向かって泳いだらどうなる、どうなると思うか。止まっているかのように見えるね。しかし、実際は止まっているか止まっていないか。実際は、川は下流に向かって流れていると。しかし、その人だけは上流に向かって流れていると。ただ、その人のスピードが遅いか

ら、止まっているかのように見えると。

つまり、ここはポイントだよ。修行には三つあるということだ。何かというと、第一は、川の流れるには逆らい切れないけれども修行していると。例えば、一日五分、十分マントラを唱えてると。これはTMなんかがそうだけでもね。徳を積まないで、ただ単にマントラを唱えてると。これは、川の流れるに逆らおうとはしているけれども流されると。しかし、他の人に比べて流れていくスピードは遅いと。よって、落ちる世界はどうだ、世界の中でも高いと。

いいか、じゃ次にだ、第二の修行者のタイプは、川の流れと同じスピードで逆向きに泳いでいると。よって、止まっているかのように見えると。この人は最も人間的な人だと。最も情のあふれる人であるということが出来る。どうだ、この人は。この人は、しかし永遠にそのスピードで泳いでる限り、マハー・ニルヴァーナに到達することは無い。

そして第三番目に、川のスピード、下流に流れる川のスピードよりも強い速いピッチで泳いでると。この人はどうだ、その人のスピードによって、一生、あるいは十生、あるいは百生、あるいは千生にてマハー・ニルヴァーナに到達するだろう。

そして、ここでいう川の流れとは何かと。それは煩惱だ。しかも、その煩惱は君たちがふだん意識している、例えば性欲とか食欲というだけの煩惱ではない。例えば、睡眠に対する欲求もあるかもしれない。例えば、名誉に対する欲求もあるかもしれない。例えば、地位に対する欲求もあるかもしれない。例えば、排斥したいと願う心の働きかもしれない。例えば、貪りかもしれない。例えば、真理を全く理解できない、そして現世的な、一時的にわたしたちを満足させるけれども、本質的にわたしたちのエネルギーを低下させる、そういう欲求をよしとする心の働きかもしれない。すべては煩惱である。そして、煩惱の川の流れるは、上流から下流に向かって流れてるんだということを意識しなければならない。そして、放っておけば必ず落ちる。必ず行き着く先は地獄である。

しかし、わたしがこのような話をしたとしてもだ、君たちの中で理解できない人もいるかもしれない。そし

て、これを本当に理解できるようになるためには、君たちが功德を積み、そして日々の瞑想修行、その瞑想修行にいかにか心を乗つけるかということだ。

例えば、「自己」の苦しみを喜びとし、他の苦しみを自己の苦しみとする」と。これを単に唱えるというんじやなくて、本当に「ああ、自己が苦しいときこれを喜びしよう」と。そして、「他が苦しんでいるとき、本当に苦しみとしようじゃないか」と。そういう意識でマントラを唱えているのだ。

あるいは、「ホー、湖面に映る虚像のような、様々な幻影に引きずられ、輪廻の大海を浮沈する生き物たち。彼らすべてが絶対自由・絶対幸福なるマハーヤーナにて安住することができるよう、四無量心込めて大乘の発願をいたします」。このような唱え方をするのか、ねえ、その「ホー」という言葉、そのヴァイブレーションに自己の四つの無量心に乗つけたいと。そして、いつさいの幻影、先程言った上流から下流へ流れていく煩悩の流れに引きずり込まれ、もがいているその魂を見て、本当に哀れだと、早く上流に向かって泳ぎなさいよと、お手伝いするからと、そういう気持ちがあるかどうかだ。

つまり、わたしたちは止まっている、悪業をなさないと、例えばしようじゃないか。悪業をなさないかのように見えていても、実際は下流に流れているんだということを意識しなければならない。そして、徳を意識して積む。心の浄化する瞑想を意識して行なって、初めて上流に向かって泳ぎ出したんだと。あるいはワークにおいて、その意義を見いだす。例えば、自分は大乗の船の一部分を担っているんだと。自分がもしこのパートを外したならば、この船は沈没するかもしれないと。全力で、全精力を傾けて、今与えられた自己の功德を積める場を守るぞと、そして一生懸命積むぞと、これを日々認識できるかどうか、君たちが上流に向かって、遠い遠い最上流のマハー・ニルヴァーナに到達できるかどうかの、ただ一つのポイントであるということを確認しなければならぬ。

この世において、真理というものがある。真理とは何かといったら、金があると、そうするとある程度の人には動くという真理だ。しかし、そんなものは本質的な真理ではない。なぜわたしがこの世と言ったかというのは、そこにある。本質的な真理、それは何かと。わたしたちは必ず死ぬんだということだ。わたしたちは必

ず病むんだということだ。そして、老いるんだということだ。そして、この三つの軍勢、あるいは心に生じてくる苦しみとか悲しみとか憂いとか、そのような軍勢を打ち破ることができるのは、先程言った、意識すること、そして、意識して心のけがれを取り除くということ、意識して功德を積むということだ。そして、これが大乘の功德の積み方のベースの考え方であると。

そして、ここがポイントだね。すべての修行の背景にあるもの、これは、すべての修行というのは、ここまでは一応三つを挙げよう、大乘、そして金剛乗、ヴァジラヤーナだね、マハーヤーナ、ヴァジラヤーナ、タントラヤーナ、真言乗だね、この三つの背景にあるものは利他の心である。自己をいかに捨て、そして他を救済することができるかどうか、これが修行のポイントになってくる。それに反して、ヒナヤーナは自己の安祥、自己の平安、そして自己の自由を考える。

よって、ま、この中にも新しいシッシャ、あるいは長期バクティの者がいるみたいだけでも、よく考えなければならぬ。それは何かというと、今わたしはヴァジラヤーナの一部を説いた。しかし、法というものは、ダルマというものは、その背景に絶対的な真理を守護する、あるいは絶対的な真理に到達する、あるいは絶対的な真理に向かっている人たちをいち早く導く、そのような心を最高の崇高な心だといっている。

とはいっても、まだ自己の苦しみに没入している者が、他の苦しみを理解できようはずがない。あるいは、他の苦しみを救済できようはずがない。それも一つの真実だ。しかし、自己の苦しみは苦しみとし、他の苦しみ、他の憂いを自己の修行の根本と置くことができるならば、その人はすでに大乘としての種子が植え付けられているといえよう。

そして、いかなる方法においても、いち早く他を最終の地点まで導こうと考える心、これをヴァジラヤーナの仏陀の心、あるいは菩薩の心、あるいはタントラヤーナの仏陀の心、あるいは菩薩の心という。そして、危険なく一緒に、しかし確実に行こうとする心、これを大乘の菩薩の心、あるいは仏陀の心という。そして、行き着く先は何かといったら、マハー・ニルヴァーナである。

今日はちょっと難しい話をした。しかし、教学のできている者、きちんと教学のできている者はわたしの言

いた内容について、あるいは法の裏側にあるもの、法の奥にあるものについて理解できたはずだ。しかしもし、教学をろくにやらないでふだんから煩悩的な思考にとらわれてる者は、そしてその川の流れをよしとしている者は、今日のわたしの話を聞いたとしても何にもわからないと。

最後に、例えばここに修行者がいて、その修行者が三年間、一生懸命上流に向かって泳ごうとしたとしようじゃないか。しかし、もう疲れたと、自分は川の流れに身を任した方がいいんだと考えたとしよう。この人の来世はどうなると思うか。どうだ君たちは。来世の真理に対する縁はどうだと思うか。

ある坊さんがいて、この坊さんが他の——これはインドの話だけだね——他の教団の者につかまったと。これはイスラム教の人間だね。そして、その坊さんはいつも「仏・法・僧に帰依いたします、仏・法・僧に帰依いたします、仏・法・僧に帰依いたします」「これは、「オーム・ナマ・ブッダヤ、オーム・ナマ・ダンマヤ、オーム・ナマ・サンガヤ……」と、このマントラを唱えてたと。お前がそのマントラをやめたら、いいかな、殺さないと、しかし、やめなかつたら殺すぞと言われて、殺された坊さんがいると。どこへ行ったと思うか、君たちは。それだけ信があつたんだから、相当の高い世界へ行ったんじゃないかと思わないか、どうだ。これは、仏典では忉利天に行ったことになっている。

ということは、たかだか三年修行をやつて、そして、まあある程度の霊的経験をして、それをドロップアウトして、そしてその川の流れに身を任せ、現世の——特に近ごろ現代はけがれているから——に身を完全に任した者はどこへ流れ着くと思うか、君たちは。どうだ。地獄に行くかもしれない。餓鬼に行くかもしれない。あるいは動物へ行くかもしれない。

そして、わたしは、今最も厳しい修行をしているオウムの信徒のレベルで、よっぽど徳が高くないと天界へ行けないと思うね。次に、ある程度修行してれば人間界だと。しかも、そのある程度も、かなりのペースである程度だね。そして、オウムの信徒でも修行しなかつたら当然落ちるだろう。それは信徒とは呼べないから。なぜかわかるか。信徒とは法を信じ、グルを信じ、そして法友を信じ、一生懸命修行する人を信徒という。そうじゃないか君たちは、どうだ。ところがそれができなければ、それは信徒とはいえない。単なる入信手続き

をなした人ということになる。

そして、君たちは、わたしから見ても大変な泳ぎを行なっていると。上流に向かって一生懸命泳ごうとしてると。そして、君たちが早く最終地点、マハー・ニルヴァーナに着くことを祈って、今日の法話としたいと思います。

まず、君たちが絶対的に押さえておかねばならない、四つの修行というものがある。

その第一は、ヒナヤーナの修行である。第二は、マハーヤーナの修行である。第三は、タントラヤーナの修行である。第四は、ヴァジラヤーナの修行である。そして、この四つの修行は、その一つ一つの目的、これは同じであって、実際に結果が違ふという、まあ、大変不思議というか、大変わかりづらいというか、そういう修行体系である。そして、それは密教体系の中にすべて含まれている。

まず、第一に考えなければならないこと、それは修行の目的とは何かということである。修行の目的とは何か。これは、個人、あるいはグループ、あるいは全体——この個人・グループ・全体が、絶対的な自由を勝ち取ることである。では、いったいこの自由というものは何であろうか。

わたしが先程、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラヤーナ、ヴァジラヤーナにおいて、「目的は同じであつて、結果が違ふ」と言つたのは、ここである。

まず、ヒナヤーナの目的、これは個の自由である。マハーヤーナの目的、これはグループの自由である。そして、当然そのグループの中に個人は存在しているわけだから、個人の自由といえないことはない。次に、タントラヤーナ、これも同じようにグループの自由、そして個人の自由を目的としている。ヴァジラヤーナもしかりである。特に、このヒナヤーナ、タントラヤーナ、ヴァジラヤーナ、この三つは個人の自由というものに、まず力点が置かれる。マハーヤーナにおいては、個人の自由よりもグループの自由というものに力点が置かれる。

では、ヒナヤーナとタントラヤーナ、ヴァジラヤーナは、これは同じだろうか。実際、これは同じではない。それはちょうど、このような比喻によって理解することができる。

まずヒナヤーナは、もともと干渉する要素というものの存在、これはそのまま存在し続けているわけだけれども、その存在を認めない。認めないというのはどういうことかというところ、そこから逃げると。そして、個の

自由の状態をつくり上げようとする。

タントラヤーナとは、では、どのようなかたちで自由をつくり上げるのか。これは、干渉の存在を認め、それを十分に楽しみ、その中に没入する。そして、満足し切つた状態をつくり上げると。満足すれば飽きると。飽きた状態で離れると。これが、タントラヤーナから生じる自由である。

では、ヴァジラヤーナとは何だと。これはいつさいの干渉する要因、それを肯定する。そして肯定していながら、それといつさい無干渉の自分自身の心をつくり上げていくと。その情報に左右されないと。金剛の心をつくると。絶対壊れない心をつくると。これがヴァジラヤーナである。

つまり、自由という点においては同じである。しかし、ヒナヤーナの自由は、逃げてでも逃げてでも強烈に干渉されるような環境にあるならば、当然それは破壊されてしまう。タントラヤーナは、経験をし、満足し、そこから離れる。しかし、離れた段階でもう一度欲求が生じたならば、当然それも崩れ去ってしまう。そして、ヴァジラヤーナは、いつさいの干渉に対して絶対に動かない、壊れない心をつくり上げるわけだから、それに対して、最も完璧な心をつくることになる。そして大乘の修行は、このタントラヤーナ、ヴァジラヤーナを、ゆっくりゆっくりと、この現象界のスピードに合わせて修行を進める修行である、とすることができると。

ということは、結論は何かと。それは、いつさいの心を動かす要因から完全に解放され、そして自由になることである。

オウム真理教を批判する雑誌・テレビで、よくこういう内容がある。それは「自由を奪っている」と。しかし、今、わたしの説く自由と、それからマスコミの説く自由とは、自由の意味合いが違う。

わたしの説く自由とは何か。それは、先程も述べたとおり、いつさいの五感の制約、いつさいの表象・イメージの制約、いつさいの思いの制約、いつさいの意識の制約、そしていつさいの欲求の制約といったもの、これらから解放されること、これをわたしは自由と説く。

ところが、一般社会の説く自由というのは、いつさいの干渉、この干渉によって揺り動かされることを自由と説く。イメージによって揺り動かされることを自由と説く。意志によって、意識によって、あるいは欲求に

よって動かされることを自由と説く。

ここに、大きな違いがある。つまり、自由という一つのワードを使っている、実際は全く反対のことを説いている。では、どちらが利益があるのだろうか。

いっさいの情報——このいっさいの情報というものは、わたしたちの心に対して、いろいろな欲求を巻き起こさせる。そして、それによって動いた心は、止めどもなくAからB、BからC、CからD、DからEへと動いていく。そして、それは終わることを知らない。

では、その状態でこの世を去ったとき、いったい人の魂というものはどうなるのだろうか。死後の世界を知らない、無智なる凡夫、あるいは外道は、その死後の世界を知らないから、今この世を満足すれば、それでいいと考える。

しかし、死後の世界をきちんと知り、そしてカルマの法則を理解している者は、このように考える。「死ぬ前の制約と同じように、死後にも制約があるんだ」と。その制約は先程も述べた、色・受・想・行・識という五つの集まり、五蘊から影響を受ける。そして影響を受けたその魂は、その情報によってとんでもない方向に飛ばされ、ある者は地獄、ある者は餓鬼、ある者は動物へと落ちていく。

そして、わたしは、もう一つの自由を君たちに与えるために登場した。それは、いっさいの目から入るデータ、これから解放されること。耳から入る音、これから解放されること。嗅覚から、あるいは味覚から、あるいは触覚から解放されること。わたしたちの最終の目的、それは絶対に壊れない心をつくり上げることである。いかなる情報を入れようとも、いかなる条件であろうとも、壊れない心をつくり上げることである。

今、オウム真理教では、タントラヤーナの道を肯定していない。なぜならば、これは落ちていく道だからである。もちろん、君たちが絶対的な自由に到達したならば、それはタントラヤーナであろうと、ヴァジラヤーナであろうと、あるいはマハーヤーナであろうと、選んでもいいと考える。しかし、本質を見失う状態である以上、ヴァジラヤーナあるいはマハーヤーナといった、危険性のない、そして絶対的に自己を確立できる、しかし苦しい道を選ぶ。これが最も理想だと考える。

絶対的な自由の境地を得た者、絶対的な幸福の境地を得た者、ここに到達した者の意識状態というものを、言葉で表わすことはできない。君たちは、今日わたしが話した、ヒナヤーナ、マハーヤーナ、タントラヤーナ、ヴァジラヤーナの長所、あるいは欠点について十分に熟知し、そして自分たちの修行、自分自身の修行に、いたい、この四つの修行法のどれを選ばいいのか、十分に検討しなさい。

そして、最終的にはタントラヤーナも、ヴァジラヤーナの道に入っていかなければならない。なぜならば、このタントラヤーナの最終地点というものは、第一涅槃だからである。そして、ヴァジラヤーナの最終地点というのは、マハー・ニルヴァーナだからである。この深い意味については、また後日、もっと多くの弟子たちが存在しているとき、君たちに話すようにしたいと考えます。

修行者というものは、何を考えなければならぬか。それは、すべての情報から解放されること。そして、絶対的な真理である、「すべては変化する。絶対に固定されるものはない」ということを知ることである。そして、その変化に対して、いっさい動かない心の働き。崩れない——例えば、幸福であったとして、その幸福が崩れない。例えば、安定していたとして、その安定が崩れない。例えば、歓喜の状態であったとして、その歓喜が崩れない——。そういう心をつくり上げること、これが修行者の目的である。しっかりとやりましょう。

今日の話の本題は、ヒナヤーナ、これについて詳しく、マハーヤーナ、これについて詳しく、タントラヤーナ、これについて詳しく、ヴァジラヤーナ、これについて詳しく、皆さんに話したいと考えています。

まず、ヒナヤーナで十分ではないか。すべての現象から離れ、そして心を静め切ると。静め切った状態、透明になった状態、これで十分ではないかと、こう考える人がいるかもしれない。この状態を、刺激の加わらない水の平らな状態というふうに考えたらい。つまり、どういうことかという、ここに瓶でも、あるいは甕でもいいからそういうものがあって、その中に水が満ちているとしよう。そして今までは、それを揺らされていた。ところが、その揺らされる状況から離れ、そして瓶を静止した。すると、今まで揺れていた瓶の中の水も、自然と少しずつ安定し、そしてとどまる。そして、完全に平らな状態になる。静まり切った状態になる。これがヒナヤーナにおける涅槃である。

まず、ここで考えなければならぬことが一つある。それは、このヒナヤーナの涅槃、これにもう一度強烈な刺激を加えたらどうなるだろうかということである。当然、刺激の加わらないとき、これは安定しているだろう。しかし、自分からは干渉しなくても、周りから干渉されたとき、当然その心は乱れてしまう。そして、その心の乱れ、これがないようにしなければならぬのではないかと考える。

よく、五蘊無我——色は無常なり、受は無常なり、想は無常なり、行は無常なり、そして意識の識も無常なりという。この五蘊は、無常であるがゆえに苦である。苦であるがゆえに、此は我がものであらず、我がものにあらず。そして、遠離・離貪し解脱する。そして、釈迦牟尼の末席の弟子たちは、ほとんど神秘的な経験をすることなく、心を静め、寂靜の状態に入ったといわれている。

では、なぜ釈迦牟尼が、そうではなく宿命通を経験する、あるいはアストラル経験を豊富に行なうことにより解脱する道、これを説いたのかという問題が出てこよう。つまり、釈迦牟尼の解脱と、それから単純にこの五蘊から離れ、心が寂靜になる解脱とは、大きな違いがあるということである。

では次に、マハーヤーナの解脱を検討しよう。マハーヤーナの解脱は、今わたしたちが瞑想上、あるいはアストラル、あるいは宿命通というプロセスをたどり経験していること、これらを見直し、そしてこの現実生活において経験しようとする。そして、それこそ素晴らしいんだと考える。

君たちはどう考えるだろうか、それは君たちは、自分たちの〇歳時のことを完全に覚えているだろうか。自分たちの一歳、二歳、三歳、四歳、五歳、六歳のころの状態を完全に覚えているだろうか。あるいは小学校、あるいは中学校のころのことを完全に覚えているだろうか。つまり、この大乘の経験というものの背景には、無智というものがもとと取り払われていなければ意味をなさないということになる。つまり経験の積み重ね、これが本当の意味で積み重ねられるならば、心はそれと対比し、そして成熟に向かうだろう。しかし、経験し、その経験した片っぱしから忘れてしまう。こういう心の愚鈍な状態、無智な状態であるならば、その経験というものは、全く無意味で、全く役に立たない、全く人の心を成長させない状態になるだろう。そして凡夫は、その経験こそ素晴らしいんだと考える。

しかし修行が進み、クンダリーニー・ヨーガの成就を本当の意味でし、完成に向かうと、アストラル・トリップ、あるいは宿命通といった体験が豊富に起こる。そして、その豊富な体験は忘れることがない。なぜならば、短い期間に集中して起こるからである。そして、そういう経験をすることそのものが、サットヴァの光により自分自身の過去、そしてその過去よりも前の生、あるいは未来の生、あるいは今自分が経験している世界以外の経験を、同時にさせてくれるからである。そして、これを本当の意味でなすことができるならば、すべては無常であると、そしてすべては必ず変化する、楽の裏には苦が存在する、あるいは今は幸福でも必ず苦しみが存在する、あるいは今は豊かでも過去においてこれだけ惨めな生活をしていた、あるいは今は豊かでも未来において苦しみが生じる、こういうことを如実に知る。つまり、完璧なる三昧を体得する。

そして、その三昧により如実に智見する。すべてを知る。そうすることにより、いつさいの現象に対して、たとえそこで行為というものが存在しても、その行為に對し、心が全く乗らない状態が出てくる。これを遠離、そしてその行為に對し貪る、あるいはその行為に對し執着するということがなくなる、これを離貪という。そ

して、完全に遠離・離貪するならば、心の本性というものはすべての現象から切り離される。そして、これはヴァジラヤーナの本質的な修行でもあるといえよう。

あるいは、ヒナヤーナにおいても、ヒナヤーナの修行をしながら徹底的に心を静め、そして修行形態そのものはヒナヤーナでありながら、生活形態そのものはこの現世にどっぷりつかう。そういうことのできる人は、同じように経験することが出来る。しかし、まずわたしの今まで見た弟子たちの中で、これをこなすことのできた者は皆無だ。ということは、本質的な解脱に到達するためには、すべての感覚を、あるいはすべての経験を完全にし尽くし、超越し、解脱する以外にない。その経験は、この現世的なものではないということだ。

そして、「ヴァジラヤーナのザンゲ」を真剣に受け、精神を集中していると、必ず心三昧に入る。心の三昧に入る。そしてまず、そこで何を体験するか。感覚、この感覚が本来は幻影であることに気づく。つまり痛み、例えば痺れ、こういうものが遠のいていく。次に、心にいろいろな思い浮かぶ表象の現象が生じる。そして、その表象の現象を乗り越えようと、次にいろいろなヴィジョン、あるいはいろいろな思いが生じてくる。これは、私はこれをやりたい、あれをやりたい、それをやりたいというような思いである。そして、それを通して、次は単にデータだけ、それは光の中にデータが存在する形で生じてくる。そして、五蘊から解放される。

そして、そのデータをぶち抜いたとき、本当の意味での三昧に没入することができる。もちろん、一度の三昧、二度の三昧では、すべてを経験することはできない。一度、二度、三度、四度と心三昧に何度か入るうちに、どちら側の世界が真実であるか気づくことになる。そしてそのときには、すべての外的条件から解放された心の状態が現出する。

では、タントラヤーナというのは、いったいかなるものであろうか。もともと、人間の煩惱というものは存在している。そして、この煩惱を肯定し、この煩惱を生かし、そして本来人間の愚鈍さ、修行に向かわない心を修行に向かわせる。これが、もともとタントラヤーナの意味合いである。そして、煩惱を出し、出てきた煩惱をマントラによって、あるいは特殊な呼吸法によって引き上げる。これが、タントラヤーナの修行の本質である。

今、一般的にいわれているタントラと、そして、本当の意味でのタントラとの間には大きなずれがある。それは何かというと、完全にエネルギーを昇華できるかできないかということが、まず第一のポイントである。もし、できないような状態であるならば、それは単なる快樂主義である、単なる煩惱主義であるということが出来る。それは例えば、次のような比喻で表現することが出来る。

ここに食い物があつたと。この食い物を「飽きるまで食べる」と言われたと。そして、本当に飽きるまで、そこに苦が存在していても、本当に飽きるまで食べることが出来る心の状態をつくる。そして、それをなさせることのできるグルが存在する。ということは、そこに帰依の心というものが存在する。つまり、食べることに、気というものは、エネルギーというものは下がったかのように見える。しかし、帰依というものによりエネルギーは引き上げられる。つまりそれは、心がグルと合一したからである。

同じように、ここに食い物があり、それをひたすら食べる。そして、満腹になって、「ああ、食べた、食べた」と思う。しかし、それは帰依心がない状態であつたでしょう。この人は、単にサマーナ気を消耗しただけで、何のメリットも得られなかったことになる。それは、例えば左道タントラについても同じことがいえる。そして、このタントラの最終地点は、煩惱というものを肯定しているわけだから、心の絶対的寂靜に引き上げられることはあり得ない。なぜならば、ここに煩惱があり、その煩惱というものを満足させているうち、エネルギーを昇華させながら満足させているうちはそれでいい。そして、エネルギーが完全に上昇された状態、この状態、これは確かに涅槃の状態ではあるが、それまで培ってきた経験というカルマを残しているかたちになる。よって、そのカルマを切る別の修行法がない限り、最終の地点に立つことはできない。

わたしたちは、わたしたちの持っているもの、このすべてから解放されなければならない。例えばそれは、色、肉体において、受、感覚において、想、イメージにおいて、行、意志において、識、これは潜在的なデータにおいて、解放されなければならない。そして、それを解放するある程度の段階までは、これはタントリックの道でも到達することができるといえよう。

つまり、最も素晴らしい道、それは金剛の心、いっさいの現象から切り離された心をつくり上げることである。